

# 中世京都七条町・八条院町界隈に おける生産活動 銅細工を中心に

Production Activities in Shichijō-machi and Hachijōin-chō in Medieval Kyoto :  
Focusing on Copperwork

村木二郎

MURAKI Jiro

はじめに

①研究史

②発掘調査の成果

③文献資料からみた七条町・八条院町界隈

まとめ

## 〔論文要旨〕

京都七条町・八条院町界隈は、銅細工をはじめとした職人や商人が活動した地であることが、説話や『東寺百合文書』を主とした文書類からうかがうことができる。さらにこの地域では発掘調査がしばしばおこなわれており、铸造関連遺物を中心に具体的な職人の姿を知ることができる。そこから浮かび上がるのは、中世日本最大の金属製品工房街である。

铸造関連遺構が集中する地区を分けると、七条町に近い北東地区から生産が始まり、ピークを迎える14世紀には南の八条坊門小路から梅小路辺りで鏡生産が集中的におこなわれた推移がわかる。しかし14世紀半ばの戦乱によって、この地は大打撃を受けて職人たちは四散し、工房街の歴史は幕を閉じた。この約300年の間に、七条町・八条院町界隈では次々と新しい意匠の鏡が開発され、またそれを実現するための技術も向上したことが、出土した鋳型からうかがえる。全国に流通した鏡のほとんどが京都産であり、その多くがこの工房街で生産されたと考えられる。なかには中国や朝鮮半島にまでもたらされた製品もあり、それらから偽作品や模倣品も作られた。この地の技術力が、当時の東アジア世界のなかでもトップクラスであったことがわかるのである。

これらを製作した銅細工とは、東寺領院町の年貢台帳類に記載された「百姓」と呼ばれる階層である。そして、発掘調査によって明らかになったのは、通りに面した間口の狭い町屋こそが彼らの工房であり、その小規模な工房の総体が大金属製品工房街の実態であったことである。これまでに積重ねてこられた発掘調査成果に加え、文献資料を併せて用いることで、中世日本の技術力を支えた職人の姿を追う。

【キーワード】 銅鏡, 七条町, 八条院町, 銅細工, 鋳物師

## はじめに

京都国立博物館が保管している、旧広瀬都巽氏所蔵の銅鏡には奇妙な資料がある。物を映す面とは逆の鏡背面に、圈線や珠文、鋸歯文を繊細に巡らし、中央に草花と鳳凰を対象に配した瑞花双鳳鏡である【図1】。この鏡の周縁部分を内傾気味に削り、そこに「湖州昌卿造／延祐二乙卯春」と丁寧な刻銘を入れているのである。湖州は中国浙江省の地名で、古くから鏡作りの産地として著名である。そこで生産された湖州鏡は、日本にも中世初頭に大量に輸入されており、経塚からもしばしば発見される。延祐は中国・元代の年号で、延祐二年は1315年、日本の正和四年に相当する。この銘文を素直に読めば、中国の湖州で延祐二年の春に昌卿がこの鏡を製作した、ということになるだろう。しかし実物資料を見る限り、この鏡は明らかに日本製品で、鎌倉時代後半から南北朝期にかけて盛んに作られた、典型的な擬漢式鏡である。

擬漢式鏡とは、平安時代後期から作られていた和風文様の鏡とは一線を画した特徴的な鏡式で、中国・漢代の鏡に見られた鋸歯文帯や輻線文帯を複数巡らす。文様構成的には自由度が失われており、いわゆる和鏡の歴史のなかでは退廃的なものと捉えられがちであるが、その精緻な文様表現はむしろ技術的には最盛期を示すもので、当時の日本の工芸技術の高さを知らしめてくれる。

それに対して、広瀬氏が「宋代以降鑄鏡の技術全く衰微し、専ら上世鏡の倣製反覆に止まり、又

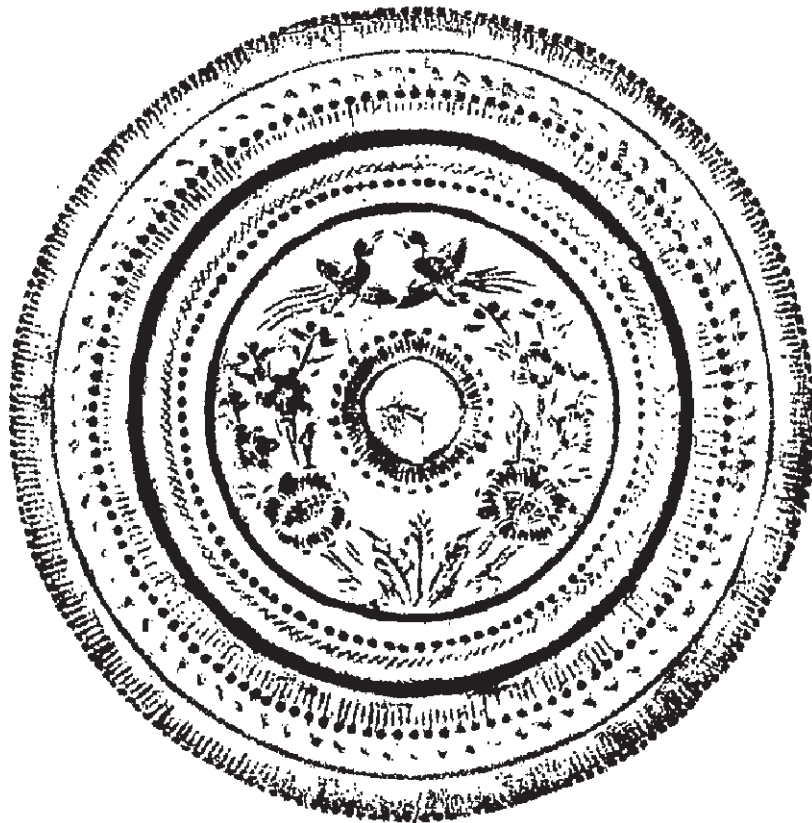


図1 延祐二年銘瑞花双鳳鏡(原寸大)(広瀬1938より)

は逆に我より輸入を受けるなど殆ど創意的の見るべきものゝ無かりし」と言っているように、中国・元代の鏡生産は下火であり、天下の湖州においてもそれは同様であった〔王 1991〕。広瀬氏はこの鏡を大正七年（1918）に中国の上海で入手しており〔久保 1999〕、これが実際に中国の地に渡っていたことは確かである。とすると、延祐二年銘瑞花双鳳鏡に刻まれた「偽刻」は何を意味するのであろうか。この資料が示すのは、中世日本における鏡生産、ひいては工芸技術の卓越性であろう。

本稿では、発掘調査によって多くの資料が加わった中世京都の七条町・八条院町界隈における職人たちの動向を、銅鏡生産を中心に検討する。ここは当時全国に流通していた銅鏡の大半を生産していた地であり、擬漢式鏡はまさにこの地で作られていたことがわかっている。さらに、『東寺百合文書』をはじめとして、この地に関する文献資料も多数残っている。東アジア世界における活発な交流が語られるなかで、中国から一方的に文物を受容するだけでなく、日本からもまた影響を与えていた双方向的な文化交流の一端をどういった人びとが担っていたのか、現場の声から検討してみたい。

## ①……………研究史

七条町・八条院町界隈の研究史をリードしてきたのは文献史学である。この地域については文献資料が多数残されている。とくに 12 世紀後半に八条女院の院庁が置かれた周辺は「八条院院町」と称され、正和二年（1313）に後宇多法皇から東寺に施入されたために、『東寺百合文書』を主とした膨大な量の東寺関連文書のなかにこの地の記述がみられる。「八条院院町在所注文」と年貢台帳などから八条院町の成立・展開を論じた仲村研氏は、院町の構成住人に「番匠、薄（箔）屋、完（椀）屋、塗師、丹屋、金屋など」の手工業者が多数含まれていることに注目しており〔仲村 1969〕、川島将生氏も同様に町中におけるさまざまな階層の「百姓」のなかの商工業者を列挙している〔川島 1970〕。七条町に金属工が居住していたことは『今昔物語集』や『宇治拾遺物語』などの説話から知られていたが、これらは平安京の東市に由来する工人の集住にまつわるものと考えられている〔脇田 1981〕。八条院町の工人たちについては時代が少し下がるものの、七条町と八条院町を切り離して考えるいわれはなく、七条町が発展、拡大することで八条院町界隈までを含む一大商工業地区が成立したと捉えられよう。

この地域は現在の JR 京都駅北側に相当し、1970 年代から発掘調査がおこなわれてきた。なかでも比較的広い面積を古代学協会が調査した平安京左京八条三坊二町の 2 次に渡る調査〔古代学協会 1983・1985〕と、京都文化財団による同七町の調査〔京都文化財団 1988〕では、刀装具鑄型を中心とした鑄造関連遺物や大量埋納銭が出土し、商工業地区としての七条町・八条院町界隈の性格がより明瞭になった〔隴谷 1983・1985、野口実 1988a・1988b〕。その後、1990 年代半ばから京都駅ビル改築工事や周辺の再開発にともなう発掘調査が集中的におこなわれると、文献史学からのイメージをはるかに上回る工業地区としての姿が現れてきた。

1996 年に開催された第 5 回平安京・京都研究集会 シンポジウム「八条院町とその周辺—中世職人町の景観と構造—」では、進行中の発掘調査成果を踏まえながら、文献・考古・建築史学の研究者たちによる学際的な議論がおこなわれた。こうしたなかで、詳細な発掘調査により建物位置や屋

地の奥の様子まで復元できるケースも出てくるようになり〔堀内 1995〕、土地売券などから語られてきた町屋の展開〔秋山 1971, 野口徹 1988〕を具体的な姿で裏付けるとともに、文献資料には残っていない町中に通じる舗装された辻の存在など新たな問題も提起されるようになった〔網・山本 1996〕。また、年貢台帳などによって住人構成までわかっている地点の発掘調査も実施されたことから、出土した町屋と住人を対応させるミクロな復元研究まで試みることが可能になっている〔上村 2002〕。

これらの考古学的成果がまとめられ〔山本 2006〕、中世京都の都市域の細かな変遷が捉えられるようになった。七条町・八条院町界隈は、総じて 14 世紀後半以降急激に遺構が減少するが、消長を丹念に追い墓域化していった様子を示した鋤柄俊夫氏〔鋤柄 2008〕、山田邦和氏〔山田 2009〕の研究は、文献資料からは見えてこなかった中世京都の画期的な変貌を語るもので、都市史研究における考古学サイドからの重要な成果といえよう。

一方、発掘調査によって大量に出土した鑄造関連遺物のなかで、注目されるのが鏡鑄型である。鏡を鑄造する際に必要な土製の鑄型は、製品を取り外す時に破壊されるため残存しにくい。そのためほとんど鏡鑄型の研究はおこなわれてこなかったが、七条町・八条院町界隈から出土した鏡鑄型は圧倒的な量で、なかには良好な状態で残っているものもある。そこから和鏡と呼ばれる中世青銅鏡製作技術の研究が久保智康氏によって急速に進展し、粗型に真土を塗りヘラやスタンプで精緻な文様を施す、非常に高い技術によってこれらの銅鏡が作られた様子が解明された〔久保 1999〕。また、鏡鑄型の一括廃棄資料をもとに技術の変遷を捉えた網伸也氏の研究からは、七条町・八条院町界隈の工人たちの自立的な技術革新の姿が捉えられる〔網 1996〕。

中世の銅鏡研究は、弥生・古墳時代の銅鏡に比べると格段に研究史が薄い。しかし、伝世品を中心に美術史的な側面から始まった研究史には長いものがあり、それを牽引してきた広瀬都巽氏の研究は未だに色褪せるものではない〔広瀬 1928・1938〕。それらの生産現場が判明したことで新たな研究の進展があったが、まだまだ研究すべきことは多々残されている。例えば、擬漢式鏡についてである。これは 13 世紀末から出現する鏡式であるが、伝世の紀年銘資料を基準にして編年案が組まれており、研究の基礎は準備されている〔佐藤 1996, 青木 1997〕。七条町・八条院町界隈から出土した鏡鑄型には、大量の擬漢式鏡鑄型が含まれている。これまでの研究史のなかにこういった資料を位置付け直すことで、さらなる議論の余地が生まれてくるのではなかろうか。

## ②……………発掘調査の成果

京都駅北側は、再開発のため京都市内では比較的発掘調査が集中的におこなわれている。ここからは、13～14 世紀を中心に、11 世紀後半から 15 世紀前半にかけての鑄造関連遺構が多数見つかっている。以下、調査区を便宜上、(1) 北東地区、(2) 八条三坊二町周辺地区、(3) 西洞院大路西側地区、(4) 八条三坊三町周辺地区、(5) 八条三坊六町周辺地区に分けて見ていくこととする。なお、調査区の番号は山本 2006 を参考に適宜追加した【図 2】。

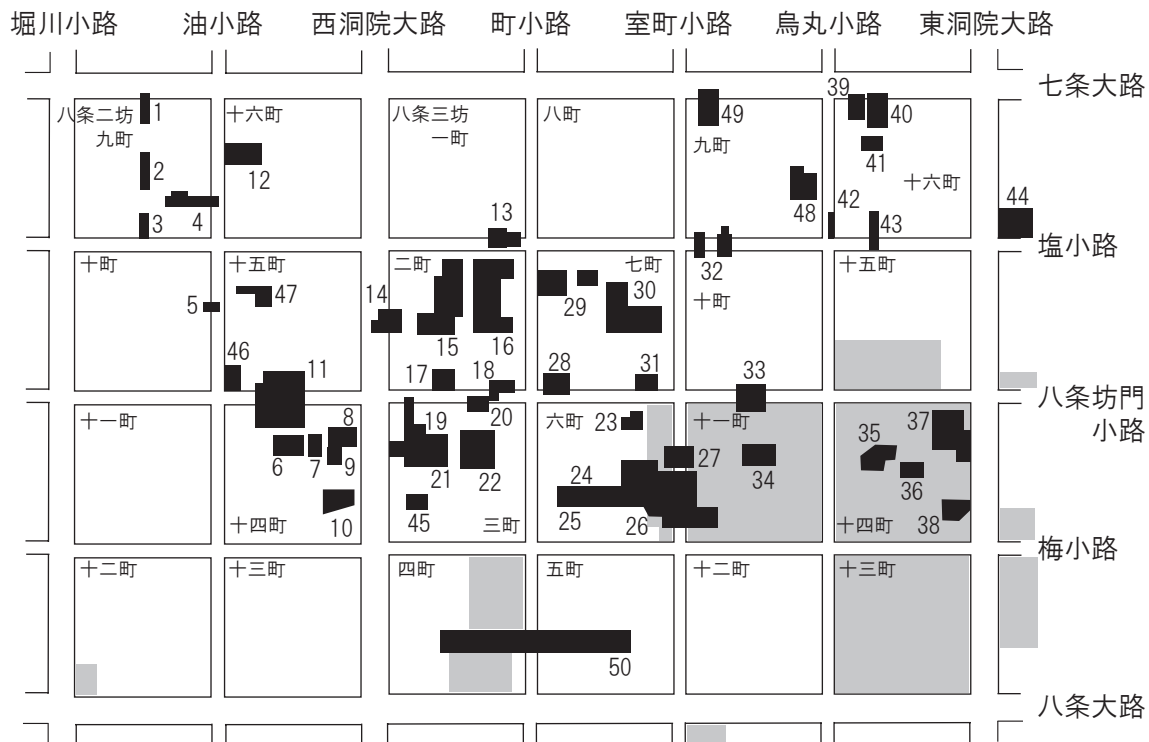


図2 七条町・八条院町界隈発掘調査地区（網掛けは「院町十三箇所」）（山本 2006 に加筆）

### (1) 北東地区 (32, 39～44, 48・49)

#### 32 左京八条三坊九町・十町・塩小路（古代文化調査会 2007）

塩小路を挟んで、八条三坊九・十町の西側を調査している【図3】。調査面積は小さいものの、九町側から鑄造関連遺物がある程度出土している。この一帯での最初期の鑄造を示す重要な資料である。炉跡は見つかっておらず、作業場の位置は特定できない。

塩小路に面したすぐ北側、室町小路に面したすぐ東側の九町南西隅<sup>(1)</sup>に掘られた、南北に長い楕円形土壇91から、四分割された長方鏡の鑄型が出土している。接合するとほぼ完形になり、最大で縦18.9cm×横24.4cm×厚さ4.4cm、文様面は周縁外側で縦15.8cm×横20.2cmを測る大型の花枝蝶鳥方鏡の鑄型である【図4】。周縁の断面形はやや台形状の三角形を呈し、和鏡の最初期の鏡式である宋鏡式に位置付けられる。鑄型は厚い粗型の上に緻密な真土を塗ってそこに施文する2層構造をもつ、中世鏡の基本的な製作技法をとっており、真土のみの単層構造をとる古代の鑄型とは一線を画す[久保 2007]。この土坑からは土師器皿と白磁碗なども出土しており、11世紀後葉の年代観が与えられている。七条町・八条院町界隈における鑄造活動を示す最も古い遺構・遺物である。

これより東側の塩小路に面する井戸108からも、文様の残る鏡の鑄型が2点出土している。同一個体と思われるこれらの鑄型には山吹飛鳥文が描かれている。12世紀前半代の土器が共伴する。

調査区内からはほかにも、真土がほとんど残っていない円鏡鑄型、三鈷杵鑄型、取瓶などが見つかっている。出土量は少ないものの、11世紀後葉から12世紀にかけて、鏡や仏具を生産する銅細工がこの地に現われたことがはっきりする。



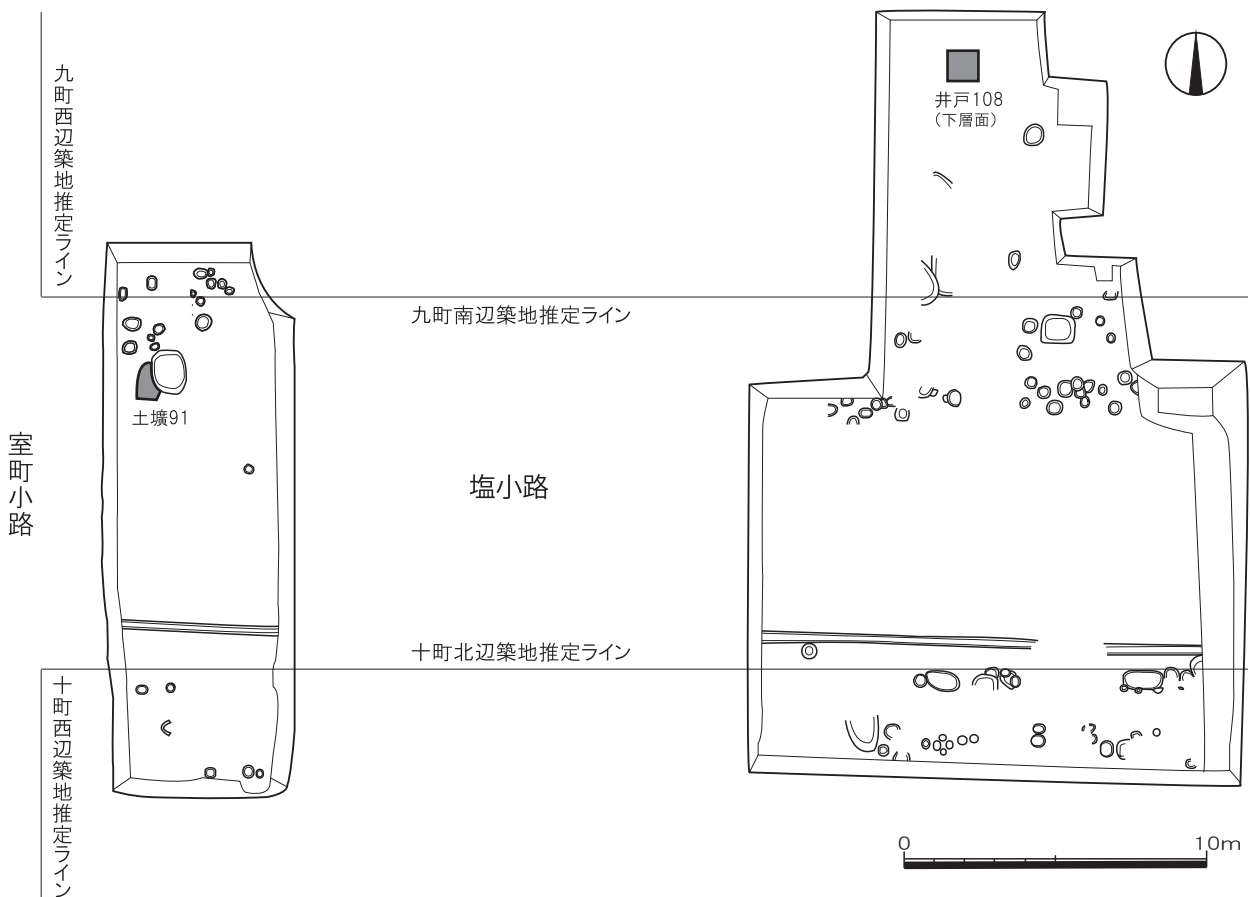


図3 八条三坊九・十町(調査区32)遺構図(古代文化調査会2007に加筆)

#### 49 左京八条三坊九町・七条大路(京都市埋蔵文化財研究所2010)

九町西北部の調査では、北端で七条大路が検出されている。平安時代前期から江戸時代までの遺構が見つかっており、江戸時代の遺構面からも铸造関連遺物が出土しているが、それらは中世面からの混入と考えられる。

平安時代後期の整地層から鏡鑄型の粗型が、12世紀代の土坑から取瓶が出土しており、このころに鑄物生産が始まったと思われる。13世紀から14世紀前半くらいまでの層や遺構から、刀装具鑄型を含む鑄型片や取瓶、轆の羽口が出土しており、集中的ではないにせよ七条大路付近でも鑄造作業がおこなわれていたことがわかる。

また、鎌倉時代の遺構面から板状の2点の金属塊が出土している。金属製品の素材と考えられているが、銅を主成分とし亜鉛が少なからず含まれているといい、真鍮の可能性はある。中世の真鍮製品の生産については未解明の部分が多く、真鍮素材を国内で生産することはできなかったとも考えられている<sup>(3)</sup>。今後注目すべき資料といえよう。

#### 40 左京八条三坊十六町(京都市埋蔵文化財研究所1994)

七条大路に面した宅地から、鑄造関係の遺物が多く出土している。鎌倉時代の遺物として、鑄型、埴塼、砥石などが報告されており、調査区49と同様に七条大路に面した地区での鑄造活動がうか

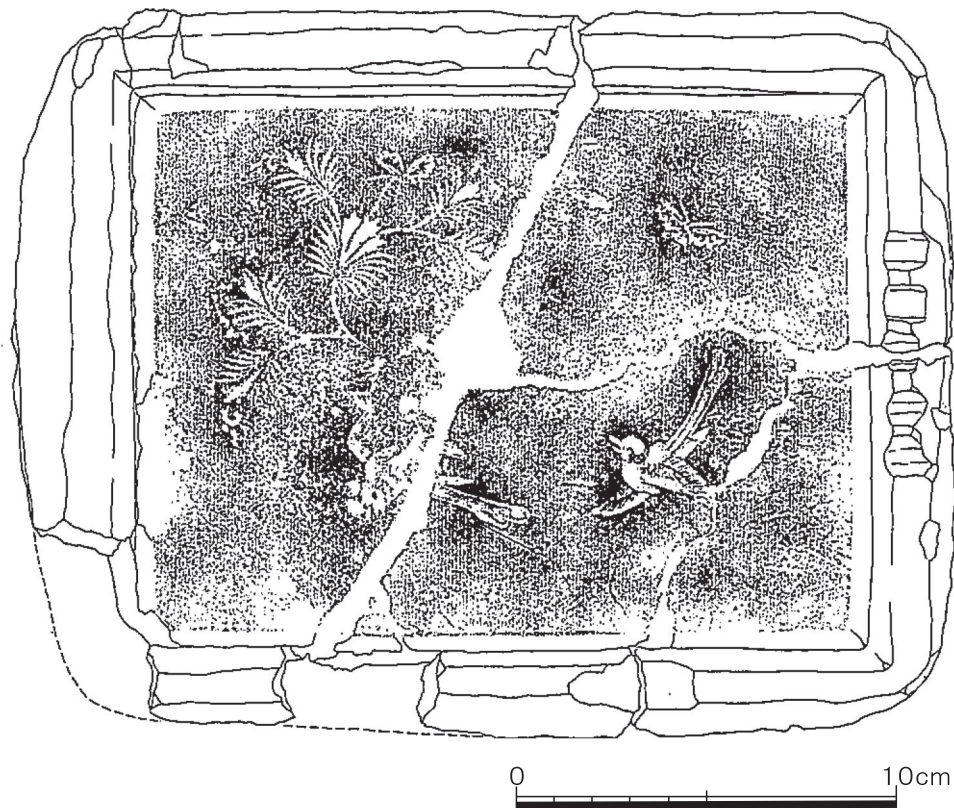


図4 花枝蝶鳥方鏡鑄型(久保2007より)

がえるが、詳細は不明である。

### 小括

七条町付近の東側地域は大きな発掘調査区がなく、また詳細が不明なものも多いため実状はつかみがたい。しかし11世紀後葉から銅細工の活動がみられ、小規模ながら14世紀前半くらいまで点々と鑄物生産が続いていたようである。まったく鑄造関連遺物が出土しない調査区(39・41～44・48)もあり、銅細工町といった様相ではない。鏡のほか仏具や刀装具などの鑄型も出土しており、この地区では特定の製品の集中的な生産体制は取られなかったようである。

## (2) 八条三坊二町周辺地区(13・15・16・29・30)

### 16 左京八条三坊二町(古代学協会1983)

二町内の北東部を広範囲に調査している。西四行北一～五門、西三行北一～五門の東半部に相当する【図5】。褐色土層と称する中世遺構面から多数の井戸と土坑が検出されているが、建物や柵列などの遺構を復元するにはいたっていない。しかし、調査区北区の南側や調査区全域の東側に井戸が集中することから、塩小路や町小路に面した宅地の奥に井戸が設けられていた様子がわかる【図6】。

この地区からは、さまざまな種類の鑄型や埴塼、轆の羽口が出土している。町小路に面した宅地の裏手に当たる土坑や井戸跡から、ある程度の量の鑄造関連遺物が見つかった。G21P11は3.0m

× 2.7m × 深さ 0.6m の不正形な廃棄土坑である。土師器皿や中国陶磁器などとともに、鋳型、埴塼、甕の羽口、炭片などが出土している。鋳型は、兜金、縁金物、足金物、座金具、責金といったさまざまなパーツの刀装具のものである。共伴する土器から、12 世紀前半または中葉前後に比定されている。その 5m ほど南に位置する井戸跡 G27W1 から、兜金、足金物、座金具、槽金、鞘尻金物といった刀装具の鋳型と埴塼が出土している。共伴する土師器皿や東播系鉢、中国陶磁器から、12

世紀末頃と考えられている。ほかにも周辺からは同様の刀装具鋳型のほか、花瓶や燭台と思われる仏具の鋳型も見つかっている。これらのやや北西、塩小路に面した宅地の裏手にあたる井戸跡 G17BW6 およびその周辺からは、鏡鋳型や不明器物鋳型が見つかっている【図 7】。G17BW6 から 13 世紀中葉頃の土師器皿が出土しており、おおまかな年代が押さえられる。不明仏具鋳型については、経筒の蓋の可能性が指摘されている。

近畿地方には 12 世紀代を中心に数多くの経塚がつくられた。播磨地域や丹後・丹波・但馬の三丹地域では、その地域特有の型式の経筒が見られるため、それぞれの地域に鋳物師が存在したと考えられる〔村木 1998〕。京都周辺や南近畿地方は同一型式の経筒が分布しており、主として京都で生産された経筒が周辺地域にもたらされた。その京都での生産地は今のところ不明であるが、当該期の生産状況を考えると、七条町・八条院町界隈が最も有力な候補地として挙がってこよう。そういう意味でも、この G17BW6 および周辺から出土した不明器物鋳型は非常に魅力的である。胴部中ほどに 1 段の括れをもち、口縁部を外側に折り曲げたような形を呈するこの器物は、上下反転すれば蓋状になる。折り曲げた口縁部分が鐙状になるため、京の経筒型式である二段笠蓋式経筒の蓋が想起される。しかし、経筒の蓋であれば天井部の甲盛りがもっと扁平であり、残念ながら類例を求めることはできない。このフォルムに近いのは火舎香炉の蓋であろうか。火舎香炉の蓋には鐙が伴わないが、鐙状に整えられた箇所は鋳型を合わせる連結部分と考えれば、この解釈も成り立つであろう。この調査区からは、三具足である花瓶や燭台の鋳型が出土していることも、同じく三具足である香炉の可能性を示唆しよう。

いずれにせよ、この地区では 12 世紀代という早い時期から刀装具や仏具を生産する銅細工がいた。しかし、13 世紀後半以降も井戸跡の広がりは見られるものの、生産活動を積極的に示す遺物は見つからなくなる。

西隣の発掘調査区 15 の井戸 24 から兜金の鋳型が出土している。かなり広範囲の調査にもかかわらず、鋳造関連遺物はこの 1 点のみであることから、この鋳型は東側の鋳物工房の廃棄物と考えてよからう〔古代学協会 1985〕。

西洞院大路とそれに面した二町内の調査区 14 では、西洞院川と東岸の井戸跡が確認されただけで、建物や生産に関連した遺構は見つかっていない〔京都市埋蔵文化財研究所 2011c〕。八条坊門小路に面した調査区 17 でも、井戸や柱穴跡は確認できるものの、建物を復元するまでにはいたらない。

西一行	西二行	西三行	西四行	
				北一門
				北二門
				北三門
				北四門
				北五門
				北六門
				北七門
				北八門

図 5 行門制



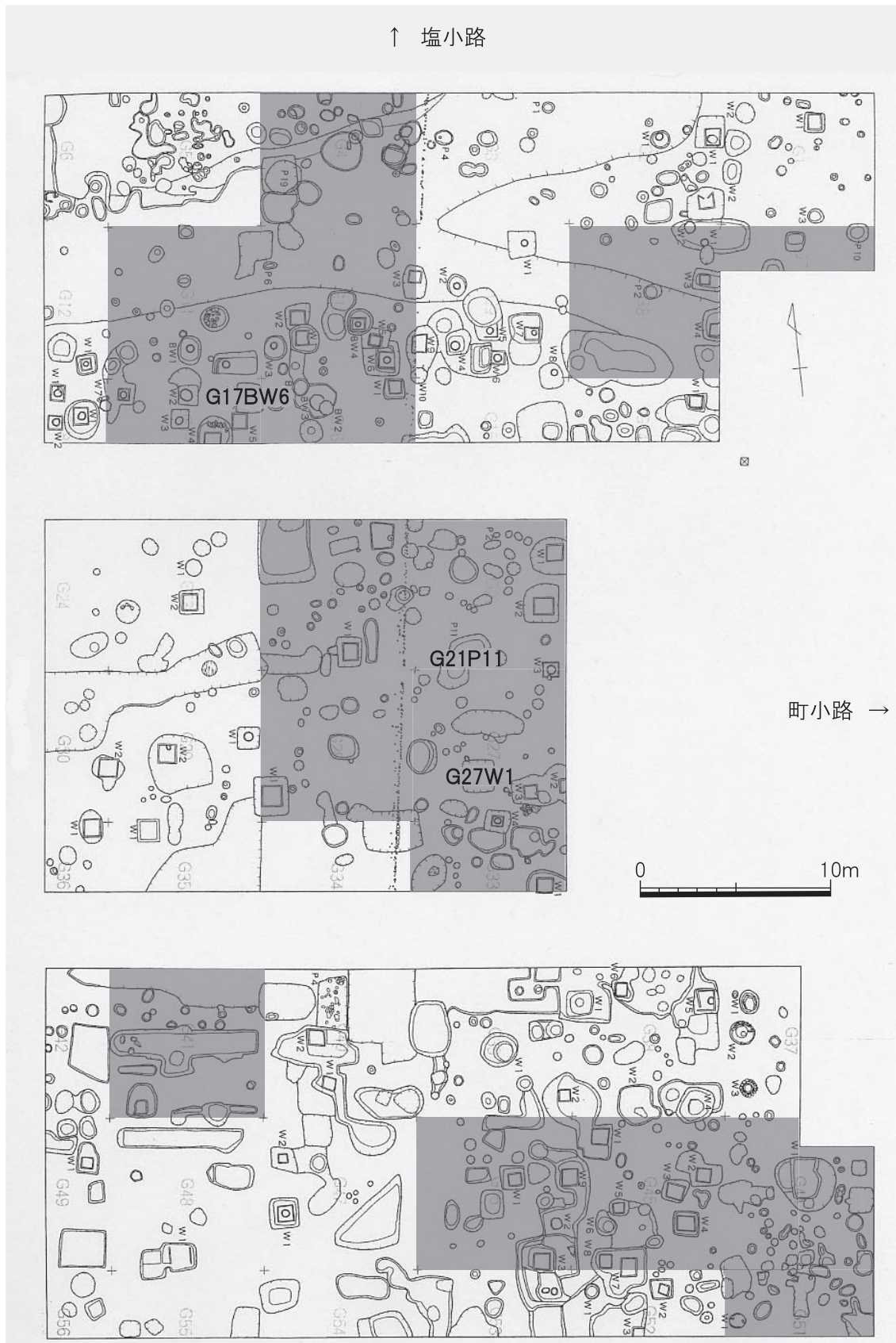
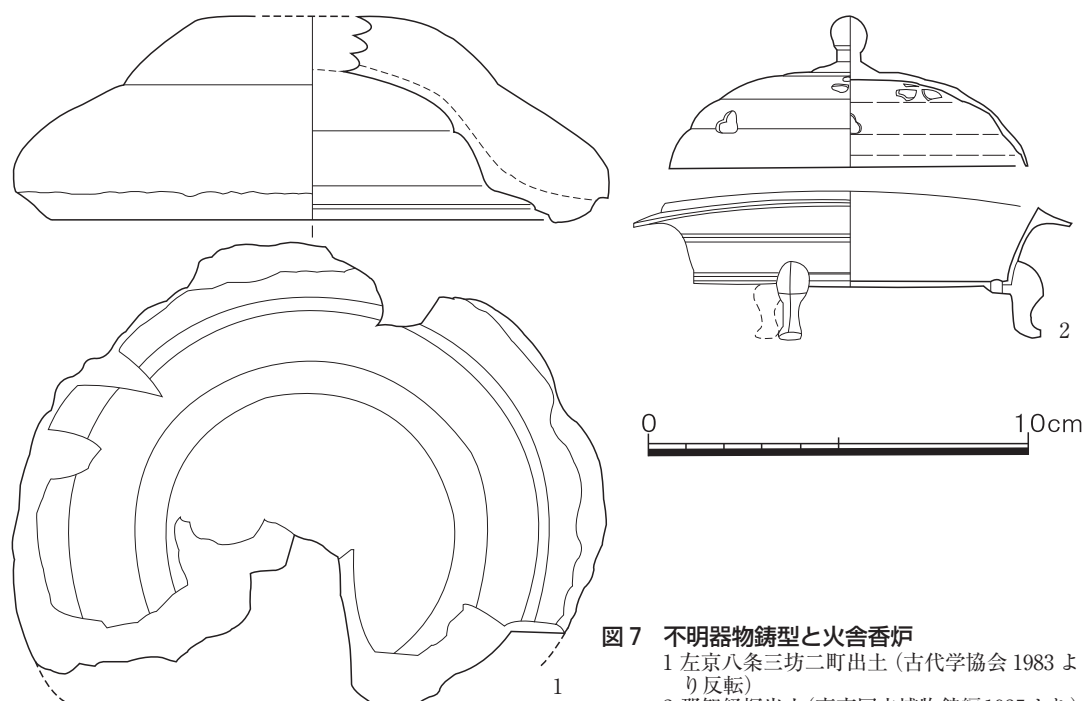


図6 左京八条三坊二町(調査区16)遺構図(網掛けは铸造関連遺物出土グリッド)(古代学協会1985に加筆)



また、生産関連の遺物も見つかっていない〔京都市埋蔵文化財研究所 2011b〕。八条坊門小路とそれに面した二町内の調査区（18・20）では、八条坊門小路北側溝と推定される溝が検出されているものの、詳細は不明である。生産関連遺物の報告はない〔京都市埋蔵文化財研究所 2008・2012〕。

### 13 左京八条三坊一町（京都市埋蔵文化財研究所 2011a）

調査区 16 と塩小路を挟んだ向かい側の、一町内の南東部、西四行北八門あたりが調査されている。遺構面は4面検出されており、その第3面の焼土溜り内や周辺から埴埴・鋳型などが出土しているが、詳細は不明である。時期は鎌倉時代前半である。鎌倉時代後半の第2面、室町時代以降の第1面からは墓壇が確認されている。

なお、この町内には経師が住んでいたことが知られている。<sup>(4)</sup>

### 29 左京八条三坊七町（京都文化財団 1988）

調査区 16 と町小路を挟んだ調査区 29 からも、13世紀代の共伴遺物と共に埴埴や鋳型などが出土しているが、鋳造関連遺物の一括廃棄土坑というには量的に少ない。炉跡なども見つかっており、この場所で鋳造作業をしていたかどうかは疑問である。鋳型は刀装具が確認でき、東側調査区 30 や、町小路を挟んで向かいの調査区 16 と同様である。

なお町小路に近い地点から、曲物に入れて埋めた大量埋納銭遺構が2つ並んで見つかっており、31415点の銭が収められていた。

### 30 左京八条三坊七町（京都市埋蔵文化財研究所 1982）

七町内北東部、西三行二～四門、西四行四門辺りをL字型に発掘している。鎌倉時代後半から

室町時代とされる1・2面から鑄造関連遺物が出土している。炉かと考えられている廃棄土坑など遺物が集中するのは、小路に面していない町内中央部側である。鑄型の種類としては、刀装具、花瓶、銭などがある。

### 小括

八条三坊二町では、12世紀前半という早い時期から銅細工が存在し、刀装具を主として仏具なども生産していた。しかしその活動は12世紀代をもって見られなくなる。周辺の一町や七町域では一部鎌倉時代や室町時代の遺構面からも鑄造関連遺物が出土するが、その規模は大きくない。また、他の地点で多数出土する鏡鑄型があまり見つかっておらず、刀装具を主とした特定の製品に特化した生産状況がうかがえる。

### (3) 西洞院大路西側地区 (5～12, 46・47)

#### 47 左京八条二坊十五町 (京都市埋蔵文化財研究所 2004a)

遺構面は下層遺構面、上層遺構面の2面が確認されており、それぞれ平安時代から鎌倉時代、室町時代とされる。下層遺構面のうち平安時代中期以前にさかのぼる遺構は柵1条、土坑1基、旧流路のみであり、その他は12世紀後半～13世紀後半に位置付けられている。上層遺構面も、16世紀中頃の肥溜が2基見ついているものの、それ以外は14世紀前半から15世紀前半のものである【図8】。

下層遺構面からは、東西方向の柵列が3条見ついている。とくに柵3の東端と柵2の西端、お

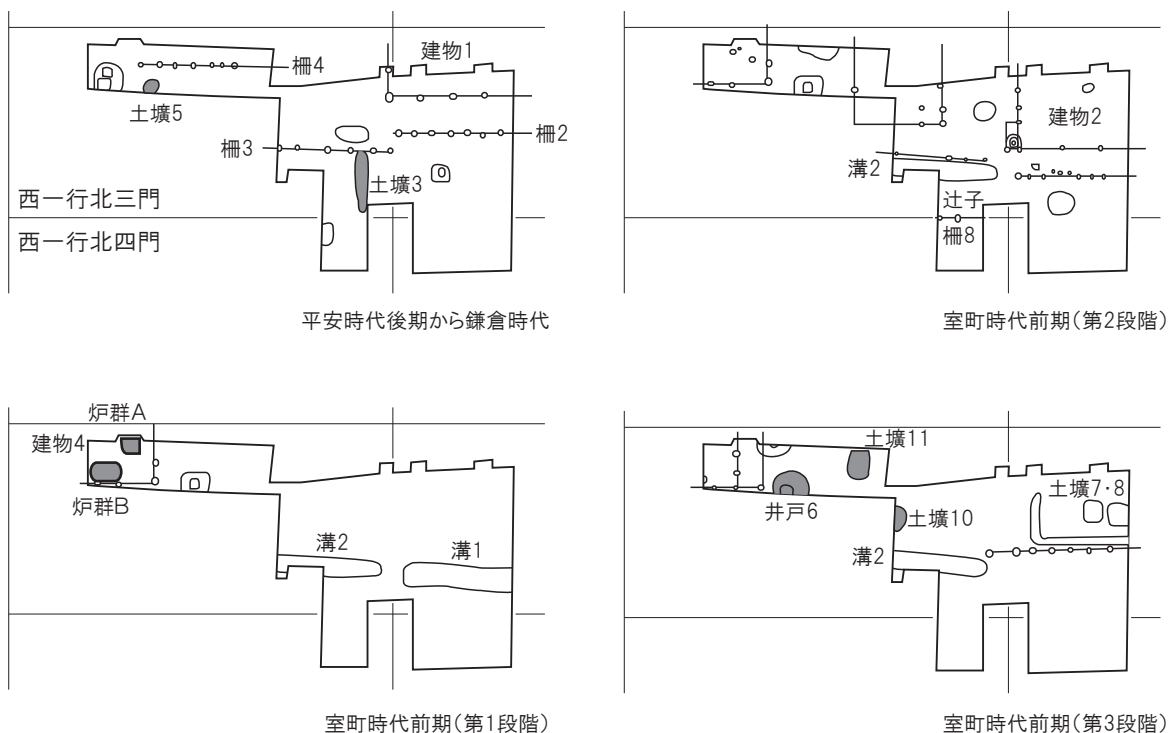


図8 左京八条二坊十五町(調査区47)遺構変遷(網2004に加筆)

よび建物 1 の西端は西一行と西二行の境界に当たっており、四行八門の区画単位が活きていることが指摘されている〔網 2004〕。柵 4 と柵 3 に挟まれた宅地のうち、油小路面から 10m ほど奥にある、直径約 1.1m × 深さ約 0.7m の土壙 5 から、鏡鑄型が大量に出土している。土師器小皿が少量共伴しており、13 世紀前半までさかのぼる可能性が考えられている。この南隣の宅地内になる、柵 3 南側にある南北約 4.9m × 東西約 1.0m × 深さ約 0.3m の南北に細長い土壙 3 からは、刀装具鑄型や埴塼が出土している。こちらからは鏡鑄型は見つかっていない。共伴する土器は平安京編年のⅦ期古段階に位置付けられており〔小森・上村 1996〕、13 世紀後半の遺物群である。

上層遺構面は室町時代前期の遺構が主であるが、報告者はさらに 3 小期に分けられるという。すなわち、溝 1・2 を掘削して町内に通じる東西辻子が成立し始める第 1 段階、辻子が成立して町内中央域に建物が建てられる第 2 段階、それらの建物が衰退して土壙 7・8 のような墓墳（木棺墓）が見られて墓域となる第 3 段階、である。この間、第 1 段階に掘られた溝 2 の東端と溝 1 の西端の間は幅 2m ほど土橋状に残されており通路があったと考えられるが、ここは西一行と西二行の境界に当たる。第 2 段階に建てられた中央域の建物 2 の入り口も、このラインに面する。また東西辻子の南側をなすと思われる柵 8 は北三門と北四門の境界線に当たっており、依然として町の構造に四行八門の区画が残存している。ちなみに、溝 2 と柵 8 の間の南北幅約 3m は、礫を多く含む堅く締まった面が数層にわたって形成されており、これが辻子と解釈されている。

第 1 段階に油小路に面して建物 4 が建てられ、建物内の奥側に青銅を溶かした炉群 A が確認されている。また、それに先行すると考えられる炉群 B もすぐ南西で見つかっている。建物 4 を建てるために整地した層や、炉群 A をつくるための掘り込み地業内、炉群 A の東側に堆積した炭層からは多くの土器が出土している。これらは平安京編年のⅦ期新段階のもので、14 世紀中頃の年代が与えられている。炉群 A の中の炉 3 とその周辺からは筭や飾り板の鑄型が、炉群 A の東側堆積炭層からは小椀の鑄型が出土している。炉群 A の地業内からは提子鑄型の内型も見つかっており、この地区では 14 世紀中頃にさまざまな青銅製品を鑄造していたことがわかる。提子鑄型の外型は、炉群 A すぐ南東脇の井戸 6 や、やや離れた近世土坑からも出土している。井戸 6 からは 14 世紀中頃から後半の土器が見つかり、この鑄型も一連のものと見てよからう。ほかにも、この周辺からは銭鑄型も出土している。この同じ宅地内と考えられるやや奥まったところに、土壙 10・11 がある。土壙 10 からは鏡鑄型や埴塼、韃の羽口が見つかり、詳細は不明であるが、共伴する土器が平安京編年のⅧ期中段階で、14 世紀末から 15 世紀初頭とされている。土壙 11 からは鑄鉄関連の遺物が見つかり、埴塼に転用した土師器の中で冷えて固まってしまった鉄塊や鉄滓である。中世の鑄物師は銅鉄兼業で、鉄製品も青銅製品も作るが、銅細工である青銅鑄物師が集まっていたこの界限でも鉄鑄物の生産をしていたことが確認できる。

#### 11 左京八条二坊十四町・十五町・八条坊門小路（京都市埋蔵文化財研究所 1999b）

八条坊門小路を挟み、南北に十四町、十五町が展開する。それぞれ、西一～三行北一・二門、西一～三行北七・八門辺りに相当する。遺構面は上層から、第 1 面（室町時代前半）、第 2 面（鎌倉時代後半から室町時代）、第 3 面（平安時代後半から鎌倉時代）に大きく分けられる。このうち、鑄造関連遺構は第 2 面から確認された【図 9】。



八条坊門小路側溝は埋められて、そこに礎石をもつ柱穴が並び、路面側に新たに細い溝が掘られている。このことから、この時期には路面幅を狭めて住居が建てられていたことがわかる。柱穴は八条坊門小路に面したラインから10数mの間に分布しており、そのさらに奥側に井戸が集まっている。道路に面して建物が立ち並び、建物の奥の屋外に井戸が設けられていた街並みが復元できよう。十四町側では、道路近くの建物内に炉跡が確認されている。最も残りの良いSK1320 炉跡については、次のような詳細な報告がある。

「SK1320 は、一辺 0.6m 程の方形の竈が南北約 2.3m、東西約 1.4m の掘形に据え付けられてい

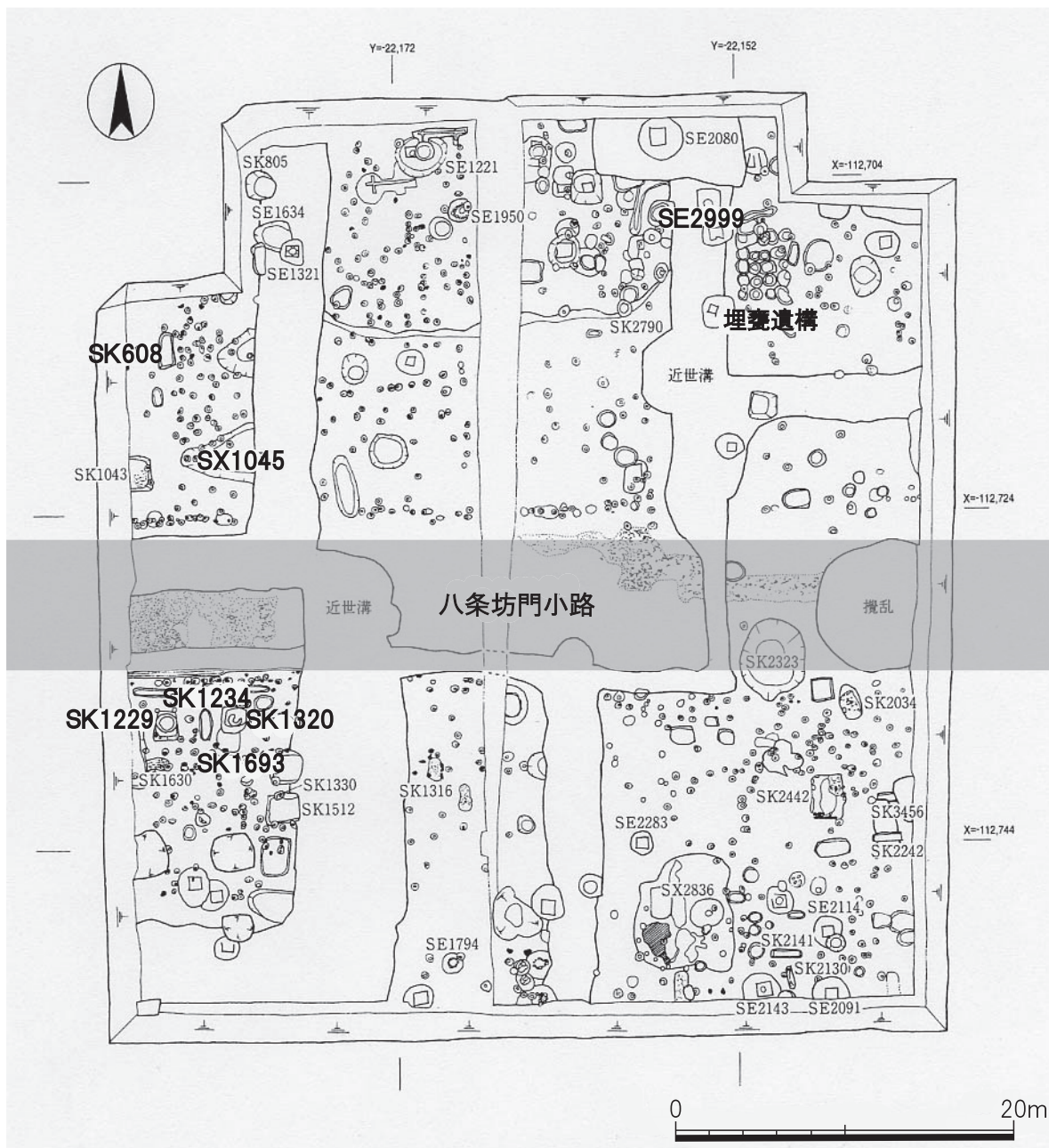


図9 左京八条二坊十四・十五町(調査区11第2面)遺構図(京都市埋蔵文化財研究所1999bに加筆)

る。竈部分は外側まで真っ赤に焼け焦げており高熱を受けたことがわかる。炉の中央部は半球形に窪んでおり、ここから埴塼の破片と銅滓が出土した。鑄造用の炉は特に水を嫌うため、据付けのための基礎作業は排水を重視している。砂礫層を、ほぼ垂直に1.2mほど掘り下げ、拳大から卵大の石に詰め替え、礫層の間層として炭と砂が詰められる。版築状に積み上げた後に、地表際に四隅に20cm大ほどの平らな石を据えて基盤とし、その上に粘土を積み上げ炉を形成していた。またSK1320の関連遺構として、西側に洗い場と思われる細長い土塋（SK1234）がある。土器溜になっており14世紀前半代の土師器皿が大量に出土した。このほか、南側には拳大の礫を敷いた土塋（SK1693）がある。」〔鈴木1999〕

ところで、SK1320およびその西側のSK1229 辺りは、西一行北一門東半部に相当する。しかし、油小路に面した宅地の奥の部分とは考えにくく、ここは明らかに八条坊門小路に面した宅地の表側と捉えるべきであろう。八条坊門小路を挟んだ向かい側の十五町西一行北八門に相当する箇所も同様で、柱穴の密集度から油小路に面した宅地の奥とするよりは、八条坊門小路に面した宅地の表と考えられよう。道路の交差点付近の宅地割を具体的に示す好例である。

十五町側からは鑄造炉は見つかっていないが、建物内の奥の位置で、特異な炉が検出されている。SK608がそれで、出土状況は南北約2m×東西約0.9mのほぼ長方形の土坑に天井部の炉壁が落下した状態と考えられている。炉壁の外側が焼け締まっていないため、それほど高温にはならなかったとみられ、鑄型を焼くか乾燥させるための炉かと報告されている。

鑄造関連遺物としては、刀装具や仏具、銭鑄型のほか、鏡鑄型が大量に出土している。粗型がほとんどであるが、真土に文様を刻んだ破片も100点余りあり、蓬萊鏡、鱗地双鳥鏡、洲浜秋草蝶鳥鏡など平安時代後期以来の系譜を引く古典的な鏡背文様の鏡が作られていたことがわかる。13世紀中頃から後半代とされる井戸SE2999から出土した梅樹双鳥鏡の鑄型は文様面がよく残っており、ヘラ彫りによって施文しているのが特徴である。粗型の裏面にはヘラ彫りの練習が残り、職人がヘラを使って流麗な文様を鑄型に描いていくさまが想像される。同じくSE2999から出土した桧垣杜若双鳥鏡も全面ヘラで施文している。14世紀前半代の遺構SX1045から出土した鑄型にはヘラ押しや型押しによる施文も見られるようで、この期間に施文技法に変化が起こったようである。また、鈕の形がわかるものはすべて花蕊座鈕である。

調査区北東に8個の甕を整然と埋めた埋甕遺構がある。これより東側には鑄造関連遺構は見つかっておらず、紺屋や酒屋など他の職種が存在したのかもしれない。

#### 46 左京八条二坊十五町（日開調査設計コンサルタント2007）

八条坊門小路と油小路の交差点付近、十五町内の西一行北七・八門西半部辺りの調査である。道路および側溝は出していない。遺構は、近世の耕作面より下には、室町時代、平安時代後期から鎌倉時代、平安時代中期の3面が検出され、室町時代、平安時代後期から鎌倉時代の面から鑄造関連遺構が見つかる。いずれも、柱穴、井戸、土坑などは多数確認されたが、建物跡を復元するにはいたっていない。全体的な傾向としては、油小路側に柱穴が集中しており、井戸はややその奥に位置するものが多い。そのため、油小路に沿って建物が軒を連ね、宅地の奥に井戸が設けられたと考えられる。ただし、数は少ないものの、道路近くに位置する井戸も存在する。ところで、調査区

11 で西一行北八門の東半部分が調査されており、そこは八条坊門小路に面した宅地と考えた。西一行北八門の西半部全面を調査している当調査地点の成果からは、交差点付近のこの箇所はすべて油小路に面した宅地と捉えられる。となると、西一行北八門の西半部は油小路に、東半部は八条坊門小路に面した宅地ということで、西半部の宅地は奥行きの短い宅地割と考えざるを得ない。西一行北七門の東半部分が調査されていないため、そこが八条坊門小路に面する西一行北八門東半部の宅地奥もしくは油小路に面する西一行北七門西半部の宅地奥のどちらに当たるのか、またはいずれでもないのか、現状では不明である。

平安時代後期から鎌倉時代の遺構面からは、炉跡が1基見つかっている。炉1と報告されるこの遺構は、東西約1.2m以上×南北約1.0m以上の楕円形掘形で、全面が焼土に覆われている。炉底は張り床などの構造は確認されていない。鏡と刀装具の鞘尻金物の鋳型が出土している。炉跡は油小路から4m程に位置しており、同町内の北側調査区47と同様に通りに面した建物内の作業場と考えられる。

調査区内では各所から、鏡、刀装具、仏具、器物などのさまざまな鋳型や、埴塼、取瓶、轆の羽口や屏風といった鋳造関連遺物が出土している。井戸36からは、土師器皿や白磁碗と共に、蓮座や器物などの鋳型が出土している。平安時代後期の年代が当てられており、この調査区では最も古い鋳造関連遺物とされる。井戸16は井戸枠が八角形を呈する縦板組で、土師器皿や瓦質火鉢などが見つかっており、南北朝期に廃棄されたと考えられている。ここからは埴塼や取瓶、轆の羽口と共に大量の鏡鋳型が出土している。この時期以降の鋳造関連遺物は見つかっておらず、この地区での銅細工の活動時期を知る手立てとなる。また、この調査区から見つかった鏡鋳型のうち、鈕の形がわかる2点はいずれも花蕊座鈕である。東側に展開する調査区11と同じであり、この地区の特徴といえる。<sup>(5)</sup>平安時代後期から鎌倉時代の面で検出された土壙24およびその周辺から、足金物、兜金、座金具などの刀装具鋳型が集中して見つかっている。この調査区内で刀装具を扱っていた銅細工は、空間的にも時間的にも限定できそうである。また、油小路に近い井戸26からは鉄滓が多量に出土している。平安時代後期から鎌倉時代のもので、この時期に鉄製品の鋳造もおこなっていたことがわかる。

## 12 左京八条二坊十六町（京都市埋蔵文化財研究所 1991）

油小路付近の調査区で、調査区内西半に鎌倉時代から室町時代の井戸や土坑が集中している。そこから、埴塼や銅製品が焼土・炭と一緒に出土しており、この辺りでも鋳物生産がおこなわれていたことがうかがえるが、詳細は不明である。

## 5 左京八条二坊十町・油小路（京都市埋蔵文化財研究所 1984a）

油小路西側側溝からあまり隔たらない、宅地内と想定される箇所から東西4m弱×南北2m以上の大型土坑SK33が見つかっている。肩部に粘土を貼り付けた痕跡があり、炭や焼土のほか埴塼などが多く含まれている。鋳造関連の土坑と考えられるが、詳細は不明である。



## 6～10 左京八条二坊十四町

調査区6では、14世紀中頃から15世紀前半の遺構を多数確認した遺構第1面から、鑄造にまつわる鑄型・坩堝・銅滓などが出土している。しかしこの時期はこの地は墓地と化し、25基の墓が検出されている。鑄造関連遺物も墓壇内から出土するものもあり、前代の遺物が埋土と共に紛れ込んだとみてよからう〔京都市埋蔵文化財研究所1999a〕。

調査区7からは鑄造関連の坩堝や鑄型などが出土しているが、詳細は不明である〔京都市埋蔵文化財研究所2002〕。

調査区8では、西洞院大路（もしくは八条坊門小路）に面した町屋の裏手に当たる位置に掘られた土坑SK68（東西約2.5m×南北約1m×深さ約0.3m）から、灰と共に埋まった坩堝や鞆の羽口、砥石、鏡や仏具の鑄型が出土している。13世紀末から14世紀初頭のものとなっている〔京都市埋蔵文化財研究所1998a〕。

調査区9は、調査区8に連続する南西隣である。鎌倉・室町時代の井戸や土坑などから坩堝や鏡鑄型などの鑄造関係遺物が出土しているが、周辺に比べるとその量は少ない〔京都市埋蔵文化財研究所1998b〕。

調査区10では、西洞院大路に近い地点にある井戸SE428から、銅鏡の破片、鑄型、鞆の羽口などが出土した。銅鏡破片には表裏に真土が付着しており鑄造過程で割れたものとされる〔京都市埋蔵文化財研究所1997〕。

### 小括

この地区で銅細工の活動が認められるようになるのは、平安時代後期である。調査区46の井戸36から出土した一括遺物が最も古く、蓮座や碗・蓋・提子といった器物の鑄型が含まれているが、鏡鑄型は入っていない。しかし、同じ調査区の平安時代から鎌倉時代にかけての炉1からは鏡鑄型が出土しており、それほど時を経ずに鏡生産も開始したようである。また、炉1のほか、土壙24とその周辺からは刀装具鑄型が集中的に出土する。調査区47の土壙5も13世紀前半までさかのぼる可能性があるが、ここからは鏡鑄型が大量に出土している。油小路に面したこれらの地点が、早い段階の銅細工の活動痕跡であり、地点によって鏡や刀装具などを作り分けている可能性がある。総体としては鏡以外にもさまざまな製品が作られている。

鎌倉時代後半になると、八条坊門小路沿いでも鑄造遺構が見られるようになる。通りに面して北側の十五町内の調査区11の井戸SE2999からは、流水文や鳥、秋草、菊などの文様が確認できる鏡鑄型が出土している。なかでも梅樹双鳥鏡の鑄型は残りがよく、幹や枝を手慣れたヘラ書きで表現している。真土の塗られていない裏面にもヘラで秋草や円が粗く描かれており、文様構成を念頭に練習描きをした様子が想像される。一方、やや新しい14世紀前半のSX1045から出土する鏡鑄型にはヘラ押しや型押しの技法が見られるようになる。ヘラの種類も多様になり、より精緻な文様表現が可能になっている。

南北朝期に入っても鑄造遺構は見られるが、十四町ブロックでは希薄になるようである。十五町側の調査区46では、井戸16から大量の鏡鑄型が見つかった。ほとんどは粗型片であるが、文様のわかる真土の残るものには菊花双鳥鏡や秋草文鏡の鑄型がある。いずれも鈕座の部分が少し



残っており花蕊座で、東隣の調査区 11 と共通する。調査区 47 では、油小路沿いに建つ建物 4 の内部に炉群 A が営まれる。14 世紀中頃を中心とする遺構群で、筭や提子、飾り板など雑多な製品の鑄型が見つっている。裏手の土壙 10 からは鏡鑄型や埴塼、羽口が出土している。共伴する土器は 14 世紀末から 15 世紀初頭に位置付けられている。周辺の鑄造関連遺構に比べてやや年代が上がり過ぎるようであり、注意して検討する必要がある。十四町側では地点 6 の 14 世紀中頃から 15 世紀前半の遺構面から鑄型や埴塼、銅滓が出土している。しかし周囲にはこの時期は墓地が広がっており、墓壙からも鑄造関連遺物が出土している。これは前代の遺物が紛れ込んだものとみなされ、すでにこの時期には鑄造はおこなわれていなかったと考えらえる。すなわち、土壙 10 は検討の余地があるにせよ、南北朝期をもってこの地区での銅細工の活動は追えなくなり、とくに南側の十四町ブロックではその現象は早く、顕著である。

なおこの一帯は火災により、鎌倉時代前期の寛喜三年（1231）に塩小路西洞院付近が焼失<sup>(6)</sup>、また天福二年（1234）にも十五・十六町を含む一帯が焼亡<sup>(7)</sup>している。それらの記録には、この付近には黄金の中務をはじめとする富裕な商人が集住しており、土倉が立ち並んでいた様子が記されている。

#### (4) 八条三坊三町周辺地区（19・21・22・45）

##### 22 左京八条三坊三町（京都市埋蔵文化財研究所 1996b）

三町内の北東側、西三行北二・三門とその周囲を調査している。調査区の北側および東側に遺構が集中しているが、この辺りは八条坊門小路、町小路に面した宅地の奥に相当する。遺構面は室町時代の第 2 面と、平安時代から鎌倉時代の第 3 面が中世面で、それぞれ 14～15 世紀、12 世紀後半から 13 世紀代とされている【図 10】。

第 3 面からは鏡や銭、刀装具、仏像などの鑄型が多量に見つかっている。町小路に面した宅地の奥に掘られた土壙 1462 は、直径約 0.7m × 深さ約 1.15m の円形で、焼土や炭などが多量に埋められた鑄造関連の廃棄土坑と考えられる。埋土の上層からは 13 世紀後半の土師器と共に、多くの鑄型、埴塼、銅滓などが出土している。とくに鑄型には湯道の両側に銭が鈴なりに連なった形の鑄型など、多数の銭鑄型が含まれており、町小路に面した繁華な街中の鑄物師の家で銭の偽造がおこなわれていたことを示してくれる。鑄型から銭銘が判読できるものには、「政和通宝」「紹聖元宝」「元符通宝」「元豊通宝」がある【山本 1996】。

第 2 面では、西三行と西四行の境よりやや西側に、南北溝が掘削される。これは町小路に面した宅地の奥境をなすと考えられている。さらにこの溝の東西両側にも L 字状に溝が取り付き区画をなしている。とくに東側の L 字溝に囲まれた区画には石敷遺構が見つかり、蔵の跡と推定されている。L 字溝に囲まれた区画は町内を南北に二分する辻に面した屋地の可能性が想定されている。条坊を形成する大路小路から奥まった町内の多様な利用状況がうかがえよう。辻に面した宅地と考えられる西側の L 字溝で囲まれた区画に設けられた直径約 0.8m の円形土壙 1424 および、八条坊門小路に面した宅地の奥に掘られた直径約 1m の円形井戸 566 から大量の鏡鑄型が出土している。14 世紀中頃に位置付けられているこれらの鑄型群には文様面がわかるものも多数含まれており、網伸也氏の鏡鑄型編年では第 3 段階の基準資料とされている【図 11】[網 1996]。

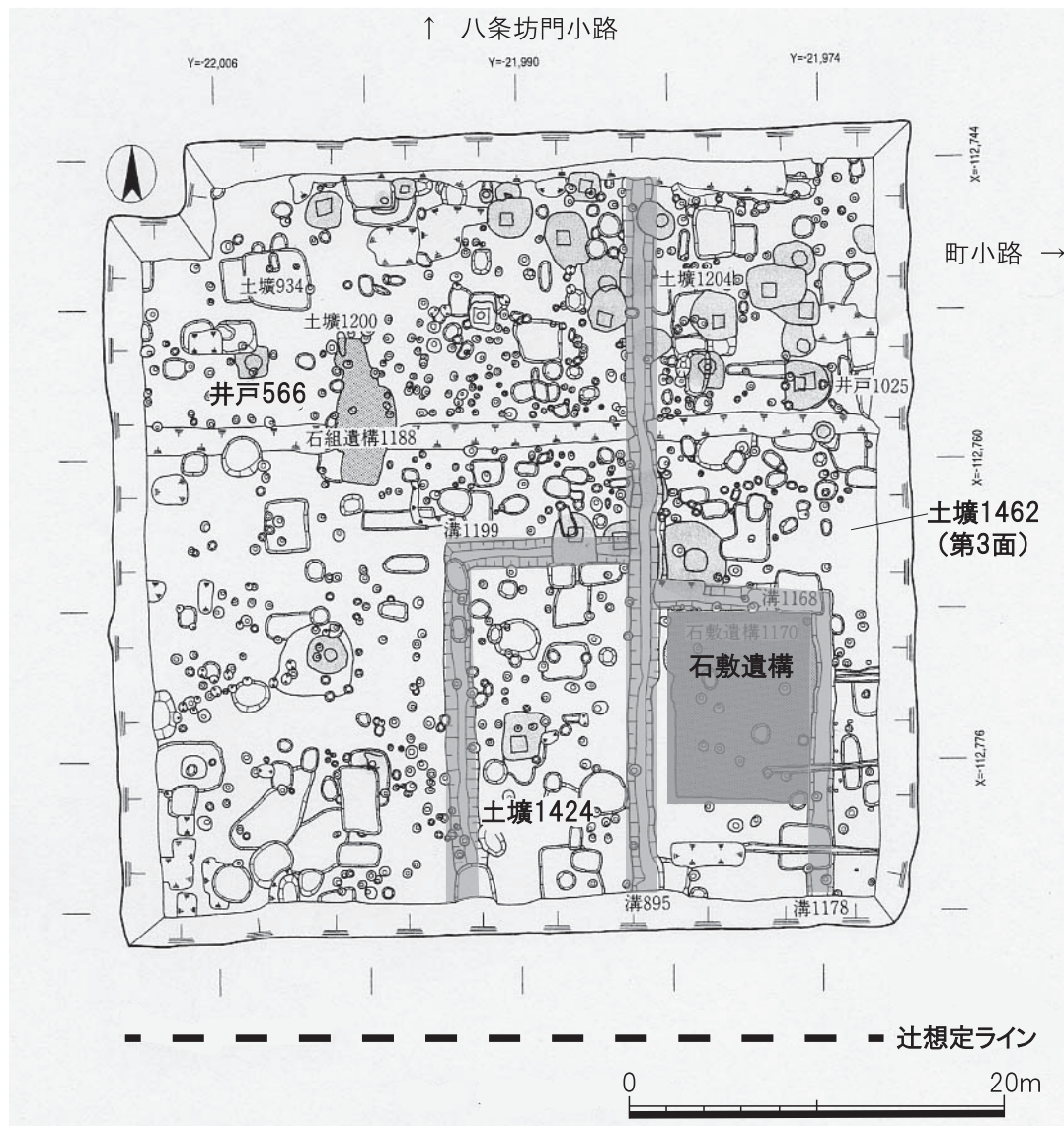


図10 左京八条三坊三町（調査区22第2面）遺構図（京都市埋蔵文化財研究所1996bに加筆）

#### 19・21 左京八条三坊三町（京都市埋蔵文化財研究所1999d・1999c）

調査区22の西隣には、別の調査区19・21が広がっている。西は西洞院大路、北は八条坊門小路にも一部かかっている。鎌倉時代後半から室町時代前半の遺構から、鋳型や埴塼、甃の羽口などが見つかっている。また、甃が集中して据えられていた埋甃遺構が複数箇所で見つかっている。紺屋や酒屋のたぐいであろうか。いずれも西洞院大路、八条坊門小路に面した宅地の裏手に位置している。

#### 45 左京八条三坊三町（京都市埋蔵文化財研究所2005）

西洞院大路に面した西一行北六門あたりの調査で、発掘調査面積は狭いが、大量の鋳造関連遺物、とくに鏡鋳型が出土した。13世紀初頭前後とされる第2面遺構からは鋳造関連遺物はまったく出土しておらず、14世紀初頭前後の第1面遺構に限られる。

土壙 94 と井戸 130 からはとくに多量の鋳型が出土しており、すべて鏡鋳型である。土壙 94 からは鏡鋳型の粗型 163 点、真土 681 点、井戸 130 からは粗型 343 点、真土 208 点が見つかった。いずれも小片であるが、真土の上に文様が残っているものもあり、そのほとんどは亀甲花文をスタンプしたものである。ほかには、菊花文、宝相華文、流水や松葉を表現したものが認められる。また、井戸 130 は方形の木枠を組んだ井戸だが、鋳造関連遺物は井戸枠内上層だけでなく井戸の掘形からも出土している。これは井戸が掘られた段階から廃絶する段階まで鋳造作業がおこなわれたことを示しており、鋳物工房が一定期間操業していたことがわかる。

### 小括

八条三坊三町内では、13 世紀後半頃に銭の鋳型がまとまって出土したほか、鏡や刀装具、仏具も作っていたことがわかる。しかし、この地区での生産が本格化するのは 14 世紀前半から中頃である。町小路、八条坊門小路、町内東西辻に面した銅細工工房の裏手から見つかった鋳造関連遺物は大量で、出土した鋳型から鏡生産に特化していた状況がうかがえる。西洞院大路側は小片ばかりであるが、亀甲花文の型押し文様が際立っている。

町小路、八条坊門小路側の工房からは完形に近い菊花双鳥鏡や亀甲散双鳥鏡など、真土の上に文様が明瞭に残っている鋳型が多い【図 11】。これらは確認できる限り、外周に幅線文帯、珠文帯、列点文帯を何重にも重ねた擬漢式鏡であり、花形の「窠文形界圏」をとっていることから、擬漢式鏡青木分類のⅡ類に位置付けられるものばかりである〔青木 1997〕<sup>(8)</sup>。また、界圏は円形界圏に太いヘラをあてて窠文形にしており、Ⅱ類でも省略化が進んでいる。菊花文を型押しで表現するだけでなく、双鳥の羽も菊花文の型を部分的に型押しして表している。鈕は花蕊座鈕と亀形鈕の両者が見られるが、亀形鈕の甲羅は正円形になっており既に形骸化している。このように、同じタイプの鏡を集約的に生産している様子が捉えられるのである。しかし、生産のピークに当たって量産に適した合理化が図られてはいるものの、多様なヘラを使った細部表現の精緻さはむしろ際立っており、この工房の技術力の高さがうかがえる。

いずれの地点も、この時期以降の鋳造関連遺物は見つかっておらず、八条三坊三町内では、14 世紀中頃をもって銅細工の工房は廃絶したといえよう。

## (5) 八条三坊六町周辺地区 (23～26・28・31)

### 24～26 左京八条三坊六町・十一町・室町小路

(京都市埋蔵文化財研究所 1984b・1996a・1996c, 網・山本 1996)

室町小路を横断して六町から十一町にわたる広範囲を調査している。発掘調査報告書、および網伸也・山本雅和氏の論考に沿って、それらについて詳しく見ていくことにする。十一町は 12 世紀後半に八条女院庁が置かれた場所で、室町小路沿いの六町も 14 世紀に東寺に施入された際の院町十三箇所に含まれている。

室町小路のほぼ路面幅で南北の流路が見つかった。出土した土器から 11 世紀代までは流路として機能していたことがわかる。また、六町内にも幅約 18m の大きな流路が見られる。12 世紀代の遺物が整地層で出土することから、この辺りは八条院御所の造営に際してようやく町としての



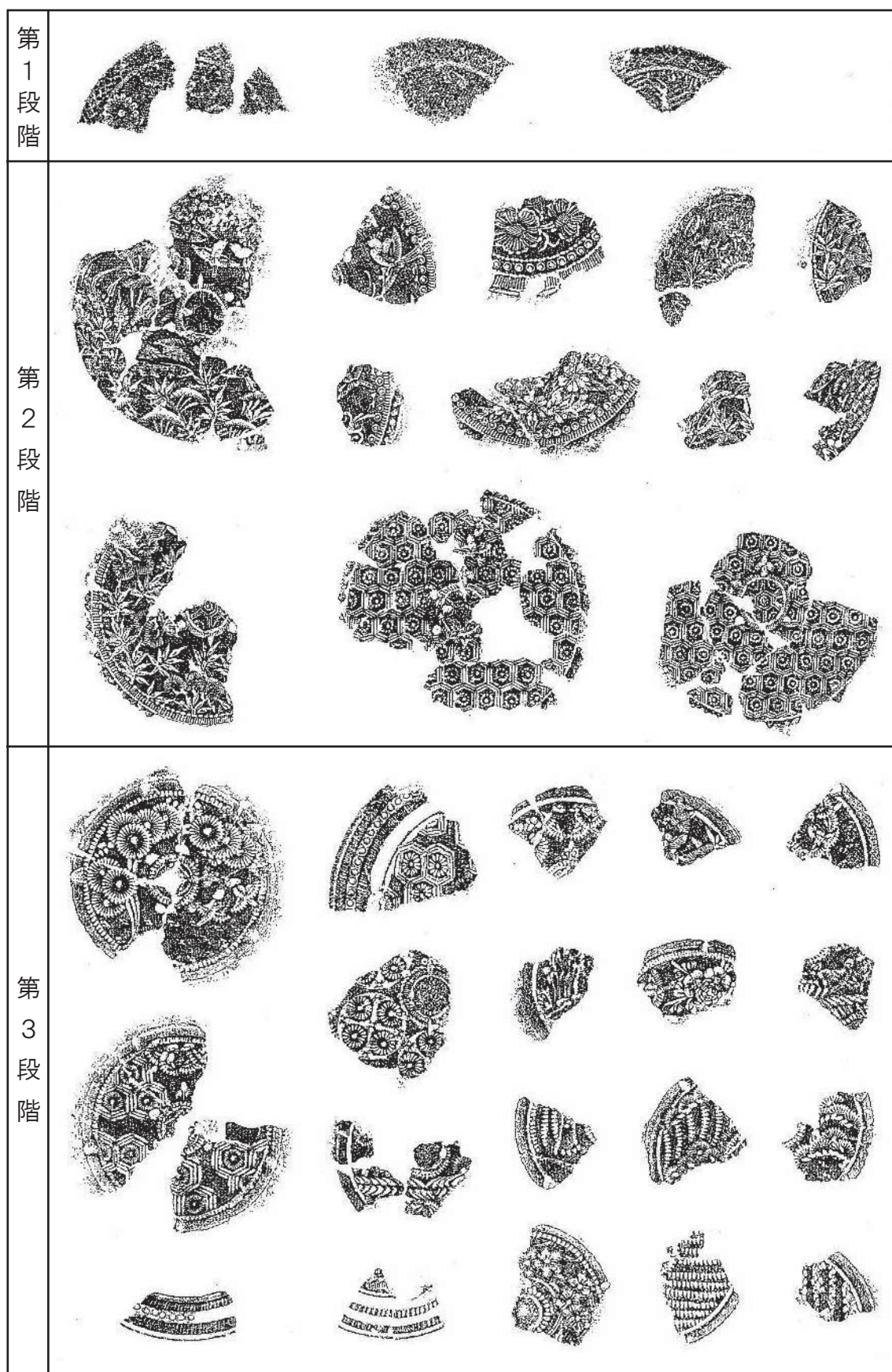


図11 擬漢式鏡鑄型からみた文様変遷（網1996より）



体裁を整えたと考えられている。

室町小路に沿った六町域からは、おおむね 13 世紀代と想定される柱穴群と 14 世紀前半代の小礎石群が検出され、室町小路に面して間口 3～5m 程度の建物が並び立つ様子がうかがえる【図 12】。建物の奥行きは 9～10m 程度のものが多く、それより奥からは井戸や土坑が見つかる。建物の裏手は空地になっており、そこに井戸やごみ穴が設けられたのであろう。調査区は六町内の南北中心軸をまたいで広がるが、その中心線にあたる箇所には細かい礫で舗装された通路状遺構がある。町内を通る辻であろうか。この通路状遺構は両側を柵列で囲まれているが、その南側柵列が表の室町小路から約 30m 入った辺りで南に折れ、屋地の裏手を限る形になっている。これらから推測されるのは、室町小路沿いの人びとが、間口 3～5m、奥行き 30m 程の細長い敷地に、小路に面して奥行き 9～10m 程の建物を建てて暮らしていた姿であろう。

この建物のなかに相当する地点から、数基の炉跡が見つかった。直径 0.5～0.7m の不定形の穴に粘土と砂泥を交互に敷き詰めたもので、表面が焼けている箇所もある。建物裏手の廃棄土坑などから大量の鑄造関連遺物が見つかったことから、この辺りに銅細工がいたことが推測されるが、これこそが金属を溶解した炉と考えられ、建物内で鑄造作業がおこなわれたことがわかる。

室町小路を挟んだ向かいの十一町側からも、完形に近い磬鑄型と炉壁を転用した炉床（SX794）が小路から約 6m の地点で見つかった。これも建物内の鑄造作業空間であろう。この遺構周辺からは水銀も検出されている。水銀は青銅製の仏具や飾金具などに鍍金をしたり、青銅鏡の鏡面を磨いて錫メッキを施す際に必要なため、銅細工の作業には欠かせない材料である。<sup>(9)</sup> それらの工程も同一工房内でおこなわれていたとすると、細かな分業体制はとっていなかったことになる。

室町小路に面した東西両調査区内一帯からは、鑄型や埴塼、轆の羽口、炉壁などの鑄造に伴う遺物が大量に出土しており、ここには複数の鑄物工房が存在した。仏具や懸仏の鑄型もあるが、鏡鑄型の量は圧倒的である。以下、良好な一括資料を見ておきたい。

六町内に入る通路状遺構より北側からも同時期の建物が想定されているが、その下層から南北を長軸とした方形竪穴遺構が 4 棟見つかった。その最大の SK332 は南北 2.5m × 東西 1.5m を測るが、床面直上から轆の羽口や埴塼片と共に鏡鑄型がまとまって出土している。直径 11cm ほどの

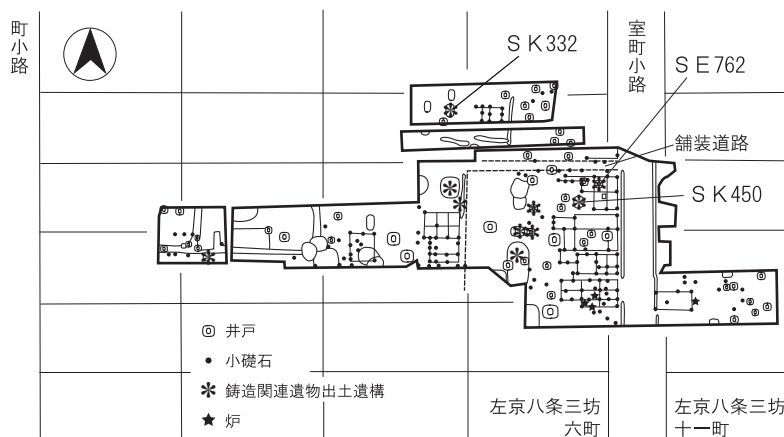


図 12 左京八条三坊六町（調査区 24～26）遺構図（網・山本 1996 に加筆）

粗型が多く、その上にきめの細かい真土を薄く塗り、ヘラや型を押して菊花散文や亀甲地文を描いている。鏡の直径がわかるものはいずれも8cm程度であり、規格性の高い小型鏡を製作していたことがうかがえる。粗型の裏面に双鳥の飛び交うさまを習刻しているものもある。これらは平安時代後期以来の系譜を引く文様で、擬漢式鏡の鑄型は含まれていない。網伸也氏の鏡鑄型編年では第1段階の基準資料とされている【図11】。共伴した土器から13世紀前半のものと考えられている。

通路状遺構のすぐ南側で、室町小路に面する辺りに設けられた方形縦板組井戸SE762と、その南西付近の土壌SK450からも、鏡鑄型が多数発見された。これらは14世紀前半代の遺物群と考えられている。これらの鑄型はSK332の一群に比べて真土が厚いためか鏡背文様がよく残るものが多く、判明する限りはそのいずれもが擬漢式鏡の鑄型である。非常に残りのよい洲浜秋草双鳥鏡鑄型は界圈より外側を欠失しているが、同じ手になると思われる秋草双鳥鏡鑄型の周囲には列点文帯と幅線文帯、鋸歯文帯が残り、これは擬漢式鏡Ⅰ類であることがわかる。亀甲花文地双鳥鏡はよく残っているものの、界圈の外側が欠失している。しかしやや肩の張った倒卵形の亀形鈕は、擬漢式鏡Ⅰ類のものと酷似している。また、細かな表現を特徴とする牡丹文、山吹文、双鳥文の鑄型には、界圈の内側に列点文帯、珠文帯、幅線文帯、鋸歯文帯が巡っている。文様部分は剥離しているものの、周縁部から緩やかな斜面をなして鏡背を形作っているのがわかる鑄型もあり、これらは擬漢式鏡Ⅲ類に分類できる。小片が多く全容は捉えにくいのが、花蕊座鈕をもつものが含まれている。このふたつの遺構から出土した一括資料群は、網伸也氏の鏡鑄型編年では第2段階の基準資料とされている【図11】。

ところで、室町小路に面する屋地のさらに奥手からは鑄造関連遺物はあまり見つからない。そのさらに西側で、町小路に面する屋地の裏手に当たる地点からは、金剛鈴などの仏具鑄型は出土するものの、鏡鑄型は見つかっていない。

### 23 左京八条三坊七町・八条坊門小路（京都市埋蔵文化財研究所 1998c）

調査区南側から路面と東西溝が検出されている。八条坊門小路とその北側溝と考えられており、想定される条坊ラインから10m程南に見つかっている。これより西の調査区28では、条坊想定ラインから八条坊門小路北側溝が出ている。

ここからは、詳細は不明であるが平安時代後期から鎌倉時代の第2遺構面、室町時代の第1遺構面の両面から鑄造関連遺物が出土している。鑄型のほとんどは鏡である。

### 31 左京八条三坊七町（京都市埋蔵文化財研究所 1998c）

調査区23すぐ北側の調査区31は、室町小路に面した八条三坊七町の宅地に相当する。ここも同様に大きく2面の遺構面が確認されており、いずれからも鑄造関連遺物が出土している。鑄型の種類としては、やはり鏡が主であるが、第1面からは錢鑄型の小片が2点出土している。詳細は不明である。

### 28 左京八条三坊七町（京都市埋蔵文化財研究所 1988）

町小路と八条坊門小路の交差点に近い七町内の調査である。調査区南端から八条坊門小路北側溝

が条坊想定ラインから見つかっている。この側溝脇の落込 11 とされる不正円形の遺構の床が固く焼き締まっており、少なくとも 2 回のつくりかえが認められるという。周辺からは鑄造関連遺物も出土しており、炉と考えられている。町小路に面した宅地の建物内辺りになろうか。

## 小括

室町小路に面した六町・十一町の南半街区には、多数の銅細工が工房を構えて仏具や鏡などを生産していた。とくに鏡に関しては、13 世紀前半には六町内で従来の和鏡の系譜をひく製品が生産され始めた。14 世紀に入るところには六町内の南北中心軸に舗装された辻が通っており、町内が整備されたようである。14 世紀前半には新しいタイプの擬漢式鏡が作られるようになり、鑄型の出土量も増加してピークを迎える。形式的には異なるⅠ類とⅢ類が同一工房内で同時に作られたことが確認でき、この地区で当時の流行の最先端をいく製品が次々と生産されていた様子を読み取ることができる。

ちなみに、梅小路室町の交差点北西角の六町の地については、13 世紀前半の土地売券が残っている。また、八条坊門小路と梅小路の間の室町小路沿いは「院町十三箇所」に含まれる範囲で、14 世紀前半から半ば過ぎにかけての年貢台帳などから、住人のある程度知ることができる。これらについてはのちに詳しく触れることとする。

## ③……………文献資料からみた七条町・八条院町界隈

### (1) 説話や記録等にみられる七条町周辺の職人たち

七条町界隈の様子を伝える文献資料には、金属製品の生産に関わる人びとが多く登場することが指摘されている。

11 世紀後半に成立したとされる『新猿楽記』<sup>(10)</sup>には、主人公の 4 番目の娘である巫女の夫として、右馬寮の史生、七条以南の保長である金集百成が登場する。彼は鍛冶・鑄物師并に銀金の細工である。鏡や仏具、容器類の鑄物も得意とし、鉄も銅も扱うとされる。もとよりこれはフィクションであるが、七条以南の地といえば鍛冶や鑄物師や銅細工などが想起されることを象徴的に表しており、すでに 11 世紀後半にはこの地にそういったイメージが重なっていたことがわかる。

12 世紀前半に成立した『今昔物語集』<sup>(11)</sup>の巻第二十「仏眼寺仁照阿闍梨房託天狗女来語第六」や、13 世紀前半の成立とされる『宇治拾遺物語』<sup>(12)</sup>巻第二の四「金峯山薄打の事」には、七条辺りの薄打ち、すなわち金箔師が登場する。また『宇治拾遺物語』巻第一の五「随求陀羅尼、額に籠むる法師の事」には七条町に住む鑄物師の留守を狙って間男がやって来る話が語られる。この鑄物師は仕事に行っており留守をしていたとして、住まいと工房が別になっていたとも考えられるが、1311 年成立の『松崎天神縁起』<sup>(13)</sup>に出てくる「白河院の御時、承保二年（1075）の頃、西七条にいと貧しき銅細工有りけり」というシーンには、住居の一室に工房が描かれている。職住一体の職人もいれば、そこへ通う職人もいたのであろう。いずれにせよ、遺跡の情報からは、工房だけが独立した大きな鑄物工場は七条界隈には存在せず、小さな工房が乱立していたと考えられる。<sup>(14)</sup>

『吾妻鏡』文治二年（1186）二月二十五日条には、北条殿（時政）の下知と称して七条細工の鐙を押し取ろうとした不善の者のことが、また同八月二十六日条には「銅細工、字七条の紀太」が記されている。物語の世界だけでなく、実際にこのように七条界限には金属製品の生産にまつわる職人がいたわけである。11世紀後半以降、七条大宮には仏師定朝の孫とされる院助とその弟子たちが仏所を構えて盛んに造仏にあたっていたが、それには金銅製品などの細かな装飾具が多用された。その需要に応えたのは、七条町界限の銅細工たちであったことは間違いない。

平安時代末期から鎌倉時代の初めに描かれた『病草紙』<sup>(15)</sup>に登場する、「七条わたり」に住む肥満に苦しむ借上の女は有名である。やや時代は下るが、塩小路西洞院辺りが火災に遭った際、この町には裕福な者が住んでいると記され<sup>(16)</sup>、また『明月記』天福二年（1234）八月五日条にみられる烏丸西、油小路東、七条坊門南、八条坊門北（七条町を中心とした十六町域）で起こった火災記事には、黄金の中務を代表とする富裕な者たちが多数住んでおり、「土倉員数を知らず、商賈充満し、海内の財貨只其の中に在り」といった様子が知られる。文永二年（1265）二月十四日の「源友盛家地売券」<sup>(17)</sup>は、左京八条二坊九町内の塩小路に面した屋地の売券であるが、火災に遭って土倉が焼失したため土地の権利書を紛失した旨が記されており、敷地内に土倉が存在したことがわかる。このように、七条町・八条院町界限には多くの商人や金融業者も集住していた。

その他、保延六年（1140）十月の日付がある『白氏詩卷』極書からは、八条三坊一町の「町尻南之辻」に在俗の経師が住んでいたことが知られる。辻を交差点ととれば町（尻）小路に面した南角、辻子ととれば町内に通じる小路でそれに面した屋地が経師の住まいと考えられるが、いずれにせよ七条町界限の職人である。南北朝期の八条院町については、東寺の年貢台帳類に詳細が記され住民の個人名までわかる。そこには後述するように多数の職人が存在しており、この町の性格を生き活きと語ってくれる。

## (2) 土地売券に残る八条院町周辺

この近辺には土地売券がまとまって残っているところもある。八条三坊四町や九町のものなどがあるが、なかでも六町東南隅（梅小路室町西北角）については14通からなる一連の文書が伝わっている。<sup>(18)</sup>乾元二年（1303）の「比丘尼くわんゑ・孫二位御前連署請文案」<sup>(19)</sup>からはじまる土地の売買・譲渡に関わる文書群の写しで、基本的に過去にさかのぼる形で書き継がれ、嘉禎四年（1238）の「権陰陽博士賀茂朝臣所領地讓状案」<sup>(20)</sup>までの66年間の様子が判明する。それによると、梅小路より北・室町小路より西の東南角地で、室町小路に面して屋地を構えた南北14丈8尺1寸×東西11丈6寸の約1戸主半の土地が、権陰陽博士賀茂朝臣→小野氏→藤原氏上総房→右馬允殿と相伝され、この右馬允平知村が宝治元年（1247）に梅小路町太郎入道殿に売却する際に土地が東西5丈5尺3寸×南北14丈8尺1寸の短冊形に分割される<sup>(21)</sup>。その後、「むめのこうちをもてにきたのつらに、くち五ちやう五尺八寸、をくへ十四ちやう一しやく六すん（梅小路面に北頬に、口五丈五尺八寸、奥へ十四丈一尺六寸）」<sup>(22)</sup>、「室町よりハにし、梅小路おもてニ、きたのつらひんかしよりニ（室町よりは西、梅小路面に、北頬東寄に）」<sup>(23)</sup>と見えることから分割されたこの地は角地ではなく西側の区画で、梅小路に面して屋地を構え直したことがわかる。乾元二年（1303）に比丘尼くわんゑから「しやうをうの御房」に売却されたところまで残り<sup>(24)</sup>、この案文が東寺に伝来していることから、しやうをう



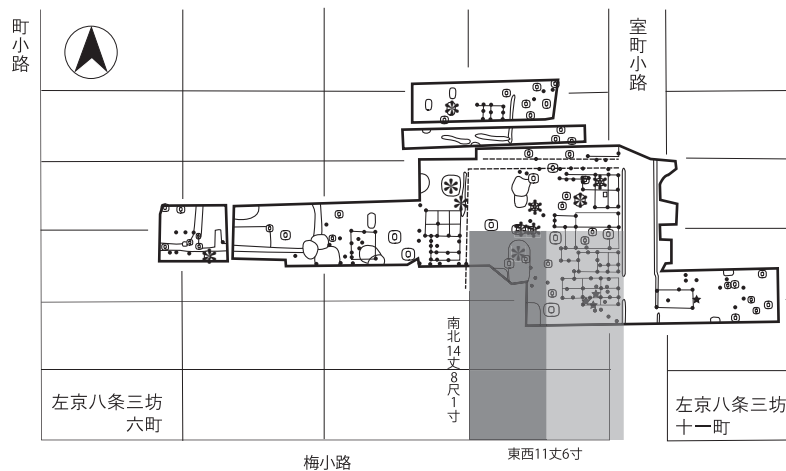


図13 土地売券からみた梅小路室町西北角地（下図は網・山本 1996）

の御房は東寺関係者の可能性がある。

院町十三箇所が後宇多法皇から東寺に施入されるのは、その10年後である。十三箇所には八条三坊六町も含まれており「同坊保（三坊二保）六町<sup>(25)</sup>四行内七戸主余<sup>(25)</sup>八条坊門南梅小路北西面」と町内の位置が記されている。1町全域を占めない箇所には、東西×南北の長さが記されているが、六町域には南北の長さが記されずに「北南通」とのみある。これは室町小路に面した南北は40丈すべてという意味であろう。ここで不明瞭な箇所がある。四行内で7戸主余の面積を占めるにも関わらず、東西の長さが5丈3尺とされている点である。これでは南北が40丈としても4戸主余にしかならず矛盾する。

ここで想起されるのが、梅小路室町西北角の土地である。この地は分割して相伝され、西側半分は梅小路に面する土地となり、大勢の手を経て1303年にしやうをうの御房の所有するところとなった。一方、室町小路に面する東半分の角地はどのような経緯を経たのか不明だが、1313年に施入された院町十三箇所に含まれている。とすると、この東半分の角地は東西5丈5尺3寸の奥行きしかもたず、この5丈3尺とほぼ一致するといえよう。そもそもこの角地は1303年の段階から、東西11丈6寸とされ本来の条坊計画ラインから大幅に室町小路を侵食して屋地としている。発掘調査で見つかった溝のラインが室町小路側に寄っていることは考古学的にもこの事実を支持するもので、しかもそのズレは1丈6寸とほとんど重なってくる【図13】。この実際に占拠していた土地の境界線を基準に面積を算出すると、六町の四行内は南北40丈×東西11丈6寸、そこからしやうをうの御房の土地東西5丈5尺8寸×南北14丈1尺6寸を引くと7.7戸主となり、六町内に7戸主余の土地が施入されたという記述と一致する。<sup>(26)</sup>

西側のしやうをうの御房の土地売券案が東寺に残されている以上、この地は東寺が独自のルートで集積していた所領と考えられ、施入された十三箇所には含まれていなかったのである。東寺領院町の年貢台帳類には梅小路面にもいくばくかの所領があることが記されており、このことと符合する。<sup>(27)</sup> また、相伝の過程でこの土地が「依為地院町」ともいわれているように、十三箇所以外にも院町とされる土地があったことがわかり、東寺領院町とはそれらをも包括して把握しているのである。<sup>(28)</sup>

### (3) 年貢台帳類からみた八条院町の職人たち

後宇多法皇から東寺に院町十三箇所を施入されて以降、院町の年貢に関わる文書が見られるようになる。

- ①元応元年（1319）六月「八条院々町地子帳」（『東寺百合文書』へ函21）
- ②延元元年（1336）四月八日「八条院々町年貢散用状」（『東寺百合文書』へ函29）
- ③建武五年（1338）「八条院々町地子帳」（『東寺百合文書』へ函36）
- ④康永元年（1342）八月十一日「八条院々町年貢銭散用状」（「暦応四年（1341）院町御年貢散用状」『東寺百合文書』ま函3）
- ⑤文和四年（1355）か「八条院々町公用下地注文」（『東寺百合文書』へ函224）
- ⑥延文二年（1357）四月十三日「八条院々町下地検知注進状」（『東寺百合文書』ケ函48）
- ⑦貞治元年（1362）十一月二十一日「八条院々町地子并荒不作注文」（『東寺百合文書』へ函67）
- ⑧応永十年（1403）九月「応永四年八条院院町地子銭散用状」（『教王護国寺文書』3-824）
- ⑨年不詳「八条院々町分帳」（『東寺百合文書』ケ函334）

これらには、東寺領院町に屋地や畠をもっており年貢を負担した人びとの名前が克明に記されている。なかには、職名で記されているものもあり、番匠・金屋・箔屋・椀屋・塗師・蒔絵師・丹屋・豆腐屋・紺屋・檜皮屋・笠屋・鹿屋・皮屋・綿屋・紙屋などの職人が住んでいたことがわかる。番匠・金屋・箔屋は金属関連の工人であり、七条町界隈に金属製品加工に関わる職人が多くいたことと対応するが、それ以上に雑多な職種が見られることも注目されよう。そのいちいちを詳細に検討する力はないので、ここでは発掘調査地点とも重なる八条坊門小路一梅小路間の室町小路に面した住人について、少し詳しく見てみることにする【表】。

①は大路・小路に面したそれぞれの町を図示し、そこに名前と地子額、納付日を列記している。六町側の西類には、北から又次郎、性心、妙蓮、又三郎、覚法、……、四郎大郎、戒心、右兵衛尉、教阿ミ、修賢と27名が記され、60～300文、計4444文の地子を納めている。うち10人が200文である。十一町側の東類は南から北へと列記されているが、便宜上北からに直すと、戒阿ミ、刑部次郎、願阿ミ、アクリ女、刑部三郎、……、又石、蓮暁、丹屋、孫次郎、行妙の25名が記されており、200～600文、計8050文と西類の倍近い地子を納めている。うち8人が300文、200文・400文が4人ずつである。地子の額が間口に应じて掛けられているのであれば通りを挟んでこれほどの違いが出るのは疑問で、奥行きの丈尺も関係があるのだろう。施入された院町十三箇所の記述に、十一町は一町全部が含まれるのに対して、六町は西四行内の七戸主余である。すなわち、東類は奥行き20丈の面積が取れるが（烏丸小路に面した地と折半したとして）、西類は10丈しか奥行きが取れない。この両類の倍近い地子の差は奥行きの面積と関係がありそうである。さて、東類には北から12番目に薄屋（箔屋）、22番目に「番匠入道」と号す蓮暁が、23番目には丹屋といった職人が見られる。西類の住人で北から17番目の又次郎の右肩には「東ノツラノ番匠ノ許ニアル物歟」と記されており、又次郎はこの蓮暁のもとに通う職人であろう。

19年後に作成された③には、図はないものの、西類、東類ともに南側から名前、地子、納付日

表 八条坊門小路―梅小路間室町小路の変遷

	①八条院々町地子帳 1319 年	地子額	人物	地子	③八条院々町地子帳 1338 年	地子額	人物	地子	⑥八条院々町下地検知進状 1357 年	地子額
西類	又次郎	60	○	○	又次郎	140	○	○	又二郎入道	140
	※号祖／妙蓮	80								
	性心	100		○	左近三郎	100	○	○	左近三郎	100
	※彦三郎	140		○	木藤三郎／今又次郎	140	○	○	又二郎	140
	又三郎	200		○	成寛	200	○	○	成寛	200
	覚法	80	○	○	覚法	80		○	伊与	80
	理証尼	100	○	○	理照	100	○	○	理照	100
	文勤入道	200		○	木手六／今又三郎	200	○	○	又三郎	200
	号尼／経阿ミ	100		○	五郎三郎	100		○	弥五郎	100
	西心	150	○	○	西信	150			源内	100
	長春	170		○	又四郎	170	○		又五郎	44
	善仏	200			ヒコ太郎	123	○		又四郎	65
	覚心	200	○		※覚信	157			彦太郎	163
	与三	200	○		※与三	135			源内	130
	伊与	260			ヒコ三郎	138			九郎	90
	智阿ミ	250			左近五郎	250	○		左近五郎	250
	東ノツラノ番匠ノ許ニアル物敷 又次郎	94	○		又次郎／今左衛門二郎	210			三郎	280
	善阿ミ	200		○	七郎／今右衛門三郎	200			戒心	204
	又了意／妙阿ミ	190		○	見三	190			五郎	106
	大進房	200	○	○	大進	200			平太郎入道	200
	善願	100		○	藤三郎入道	100			同	200
	右馬允	300			トウ御前	100			道念	200
	四郎大郎	120			仏成	100				
	戒心	150			馬入道	200				
	右兵衛尉	200			馬太郎／今カフ阿ミ	135				
					馬次郎	140				
					レン正	120				
	教阿ミ	200	○	○	教阿弥	200				
	修賢	200	○	○	修見	200				
	総額	4444			総額	4278			総額	3082
東類	戒阿ミ	490			大夫三郎	110			又六	110
					与一	140			同	100
	刑部次郎	220	○	○	形部二郎	220			蓮法	150
	願阿ミ	400			九郎二郎	136			左近太郎	100
					トウ次郎	234			又六	100
	アクリ女	230	○		アクリ	270			同	200
	刑部三郎	400			善信	350			道念	150
	左衛門次郎	350			道念	378			左近五郎	120
	助三郎	200			五郎太郎	266			又六	100
	又五郎	300			トウ六	266			又二郎	100
	後家尼	300			石御前	400			左近五郎	100
	円心	400			右衛門五郎	266			源内入道	100
	又猪熊下人名／石井女	600			シ阿弥	266			右衛門四郎	300
					九郎	366			紀六	260
	薄屋	200	○		ハクヤ	418			又二郎	250
	※蓮阿ミ	200	○		レン阿弥	260			左衛門二郎	300
	※阿念	250			左衛門四郎	300			又二郎	250
	※美濃法橋	250	○		ミ乃法橋	300			南無阿弥	300
	又蓮性トモ云／本阿ミ	300	○	○	本阿弥	300			源内入道	200
	蓮法	500			左近五郎	240			同	340
					チクセン	330			清太郎	300
	孫太郎	300	○	○	孫太郎入道	300			道念	500
	観法	400			随性アト	280				
					同（四郎五郎入道）	220				
	平七後家／法阿ミ	200		○	四郎五郎入道	200				
	又石	300	○	○	又石	300				
	号番匠入道／蓮暁	300	○		蓮教	340				
	丹屋	300	○	○	ヘニヤ	310				
	孫次郎	300	○	○	マコ次郎	310				
	行妙	360	○		行妙	310				
	総額	8050			総額	8386			総額	4430

(○は人物、地子が前代と同じ場合。人名は基本的に資料の並び順で記すが順序を入れ替えた者には※を付した。アミ掛は⑨に記載があるもの。)



が列記されている。北側から読み換えると、西類には北から又次郎、左近三郎、木藤三郎（今又次郎）、成寛、覚法、……、馬入道、馬太郎（今カフ阿ミ）、馬次郎、レン正、教阿弥、修見の28名が記され、80～250文、計4278文とやや減少するものの同じくらいの地子が納められている。うち7人が200文、6人が100文である。又次郎、覚法、理照（①では理証尼、以下同）、西信（西心）、与三、覚信（覚心）、又次郎、大進（大進房）、教阿弥（教阿ミ）、修見（修賢）の10名は①にも名前が見られることから、この地に20年近く住み続けていたようである。また、又次郎は60文から140文に、与三は200文から135文、覚信は200文から157文、通い職人の又次郎は94文から210文と地子に変化があったが、覚法80文、理照100文、西信150文、大進200文、教阿弥200文、修見200文は以前のままである。与三と覚信の並び順が①と③では異なるなど多少の変転はあったようだが、14世紀前半の鎌倉時代末から南北朝初期のこの地域の住人は、比較的安定した生活を送っていたと言えそうである。通い職人の又次郎の地子が倍増しているのは、独立して自分の工房を構え屋地を広げたためかもしれない。

東類には北から大夫三郎、与一、形部二郎、九郎二郎、トウ次郎、アクリ、……、又石、蓮教、ヘニヤ、マコ次郎、行妙の30名が記され、110～418文、計8386文と前代よりやや多い地子が納められている。うち5人が300文、4人が266文、3人が310文である。形部二郎（刑部次郎）、アクリ（アクリ女）、ハクヤ（薄屋）、レン阿弥（蓮阿ミ）、ミ乃法橋（美濃法橋）、本阿弥（本阿ミ）、孫太郎入道（孫太郎）、又石、蓮教（蓮暁）、ヘニヤ（丹屋）、マコ次郎（孫次郎）、行妙の12名は①にも見られる。ハクヤ、蓮教（番匠）、ヘニヤの職人3名はいずれも20年間に渡ってこの地で活動していたのである。アクリは230文から270文、ハクヤは200文から418文、レン阿弥は200文から260文、ミ乃法橋は250文から300文、蓮教は300文から340文、ヘニヤは300文から310文、マコ次郎も300文から310文、行妙は360文から310文で、レン阿弥とミ乃法橋の順序が変わるなど多少の変化はあるがハクヤを除いてそれほど大きくはなく、形部二郎220文、本阿弥300文、孫太郎入道300文、又石300文は19年前と同じである。住人も5名分増えるなどしているものの、西類と同様、地域住人の生活に大きな変化はなかったとみてよからう。

さらに19年後の⑥は、西類、東類ともに北側から地子と名前が記され、地子の下には地目が在家、荒、新開などといった形で注記されている。北から又二郎入道（在家）、左近三郎（同）、又二郎（同）、成寛（同）、伊与（同）、理照（同）、又三郎（同）、弥五郎（同）、源内、又五郎、又四郎、彦太郎、源内、九郎、左近五郎（有名無実／但奥筑後守■（私カ）領）、三郎（有名無実）、戒心（同）、五郎、平太郎入道（新開／本四ヶ所分）、同（新開）、道念の21名分（同一人物も含む）が記され、44～280文、計3082文（貼紙には3094文と計算されている）と大幅に減っている。しかも、合計は「以上二貫三百四十二文」となっており、「有名無実」とされる左近五郎（250文）、三郎（280文）、戒心（204文）の地子は回収できなかったようである。又二郎入道（又次郎）、左近三郎、又二郎（又次郎）、成寛、理照、又三郎、又四郎、彦太郎（ヒコ太郎）、左近五郎の9名は19年前にも確認できる（又二郎入道、理照に至っては、38年前から変わらない）。そのほとんどは北の方に住む「在家」の注記がある人たちで、又二郎入道140文、左近三郎100文、又二郎140文、成寛200文、理照100文、又三郎200文の地子は変わっておらず非常に安定している。一方で、半ばより南で前代から存在する又四郎は170文から65文、彦太郎は138文から163文と変化、左近五郎の250文は

以前のままだが、実態は「有名無実」とされ地子も納めていないようである。また、左近五郎の南隣の三郎、戒心も「有名無実」、一軒おいて平太郎入道、同は「新開」とされ、前代に比べると非常に大きな改変が起きた様子がうかがえる。

東頼はさらに劇的な変転を遂げたようだ。北から又六、同（新開但去年／冬より麦）、蓮法（同）、左近太郎（同）、又六（同）、同（同）、道念（同）、左近五郎（同）、又六（同）、又二郎（同）、左近五郎（同）、源内入道（同）、右衛門四郎（荒）、紀六（荒）、又二郎（新開）、左衛門二郎（荒）、又二郎（新開）、南無阿弥（同）、源内入道（同）、同、清太郎、道念の22名分（同一人物も含む）が記され、100～500文、計4430文（貼紙には4433文と計算されている）と半減している。合計も「以上三貫九百七十」と書かれ、荒地からは回収しきれていないように思われる。前代と同じ名前は左近五郎しか見られないが、彼の地も「新開」であり、スムーズに移行したわけではない。在家の記載はなく、ほとんどは新開または荒地で、新開地は麦畠になっている。19年前の、町屋が立ち並び職人が工房を構えていた姿は見るべくもなく、非常に大きな転換点であったことが明白である。

⑨「八条院々町分帳」に見られる西頼の名前はほぼ⑥に対応しているが、東頼の名前は対応しない者が多く、対応する者も③と⑥が半ばする。④の未進者リストに合うものが一番多い。年不詳の⑨は③と⑥の間の時期のものかと思われるが、<sup>(29)</sup>東頼の名前の不一致状況は、この地の混乱ぶりを伝えるものであろう。

この劇的な変化の原因と考えられるのが、「院町地子事、於去年者、云洛中動乱、云民屋焼失、<sup>(30)</sup>違常式候之間」<sup>(31)</sup>、「院町事依此動乱、百姓住屋、或被壊渡于陣中、或被焼払、逢追捕等条、六条以南更無其隠之間」とあるように、<sup>(32)</sup>観応の擾乱にまつわる京中の戦乱である。これにより一帯は荒廃し、住民たちの多くは四散した。ただし、八条坊門小路より南・梅小路より北・東洞院大路西頼のように、この前後でほとんど住民構成に変化のない地区もあり、院町全体が焼土と化したわけではない。荒廃した地もその後新たに麦畠などに開発され、以前ほどではないにせよ宅地も設けられた。「学衆評定引付」貞治六年（1367）四月七日条によると、院町の地子「畠一戸主八百文、屋敷一戸主一貫文」について、百姓が「銅細工・白粉焼・紺屋等跡」は土地が荒れて一律の800文は払えないと訴え、土地を調べて「上中下差別」を設けることが検討されており、同五月十八日条には、「院町三品畠地子事」として、畠には上中下の三等級を設けて上品は1戸主あたり800文、中品は700文、下品は600文と定められている。実際にその直前の五月四日条には、梅小路町南頼捨畠、正信分口2丈6尺奥21丈5尺（55.9平方丈）、箔屋六郎分口2丈5尺奥16丈5尺（41.25平方丈）については、<sup>(34)</sup>下品なので1戸主あたり600文の地子とされている。

いずれにせよ、これらの地には銅細工・白粉焼・紺屋等がもともと住んで工房を構えており、産業汚染によって土地が痩せて作物のできが悪いという訴えがなされている。<sup>(35)</sup>とくに筆頭に挙げられるのが銅細工であり、すでに彼らはこの地を去ったということが知られるのである。年貢台帳等には「鋳物師」「銅細工」は記されていない。しかし箔屋六郎が⑤には「六郎」としか書かれていないように、職種名がわかるものはほんの一握りに過ぎず、ほとんどは名前のみしか記されていないのである。年貢台帳類に登場する人物のなかには相当数の鋳物師、銅細工が含まれていると考えられ、長年居付いていた彼らの名が消えた時、七条町・八条院町界隈は金属関連業者の町としての顔

を失ったのである。

## まとめ

平清盛をはじめとする平家一門や、八条女院が御所を構えた七条以南八条以北の左京域は、12世紀後半に殷賑を極めた。しかし平家が没落し八条女院も亡くなると、女院御所は築地も崩れて廢墟と化し、往時の面影は見られなくなる。女院を偲んで旧跡に立ち寄ったところ、すでに小さな民家が建って麦が植えられ、その変転に歎き哀しんだ藤原定家のような貴族層にとっては、そのように映ったかもしれない<sup>(36)</sup>。しかし遺跡が語る七条町・八条院町は、むしろ鎌倉時代から南北朝期にかけてさらなる賑わいを見せてくれる。そもそも、12世紀代に平家が八条に本拠を構えたのも七条町を中心とした商工業地区がベースにあったからであり、為政者の動向に関わりなく、その地に暮らす住人たちは活動的な日常生活を送っていたのである。

文献資料によると、七条町・八条院町界隈には実に多様な職人や商人が活動していたことがわかるが、考古資料の方からは比較的遺存しやすい鑄造関連遺物を通して銅細工の姿を追うことができる。その物量たるや、文献資料からの想像を遥かに上回る姿を示してくれ、全国的にも極めて稀な金属製品工房街が中世前期の京都南郊に存在したことが明らかになった<sup>(37)</sup>。

これらは一時に生まれたわけではなく、当初は七条町に近い北東地区で小規模に始まる。塩小路沿いで見つかった11世紀後葉の宋鏡式花枝蝶鳥方鏡鑄型がそれを示す嚆矢で、この地区では仏具や刀装具なども作りながら14世紀前半まで比較的小規模な生産が続いていく。やや南の八条三坊二町周辺地区では、12世紀前半から刀装具を中心に仏具なども生産したが、鏡鑄型はあまり出土していない。12世紀代をもってこの地区の生産は終了したようで、七条町・八条院町界隈の銅細工のあり方としては特異な状況である。西洞院大路西側地区では、油小路沿いで12世紀代からさまざまな製品が作られる。13世紀に入ると八条坊門小路沿いでも生産が始まり、こちらでは鏡に特化した生産体制をとる。13世紀後半のへら彫り施文から、14世紀前半にはへら押し・型押し施文へと地区内で技法が変化しているが、鈕座は一貫して花蕊座であり続け、14世紀中頃には生産が終了する。八条三坊三町地区では、13世紀後半から銅細工の活動が見られる。当初はさまざまな製品を作っていたが、14世紀前半から鏡生産に特化し、最盛期を迎える。型押し技法を駆使して緻密な擬漢式鏡Ⅱ類を生産するが、14世紀中頃に工房は廃絶する。八条三坊六町周辺地区では、13世紀前半から鑄造活動がおこなわれて古典的な文様の鏡が作られる。14世紀前半から中頃にピークを迎え、全面に精緻な文様を施した擬漢式鏡Ⅰ類・Ⅲ類が生産されるが、突如として生産が終了する。

このように、七条町・八条院町界隈の銅細工の活動は一律ではなく、当初は七条町に近い北の方から始まった。しかし鎌倉時代に入ると、八条坊門小路から梅小路辺りのやや南の地域へと広がり、鏡に特化した生産体制が敷かれるようになる。そうしたなかで、施文技法の向上や新たな文様スタイルの製品開発といった弛まぬ努力が続けられ、14世紀前半には生産のピークを迎えるに至る。にもかかわらず、南北朝の動乱がこの地域を直撃し、職人たちの離散を招いて一大金属工房街の歴史は幕を閉じるのである〔村木 2016〕。

中国・上海で発見された延祐二年銘瑞花双鳳鏡は、典型的な擬漢式鏡Ⅲ類である。八条三坊六町周辺地区でこの鏡が作られたかどうかはわからないが、中国・元の延祐二年が1315年に当たることから、14世紀前半のこの地の生産最盛期と齟齬はない。韓国の新安沖で沈没したいわゆる新安沈船からも青銅鏡が発見されているが、そのなかには擬漢式鏡Ⅰ類をはじめとした日本製鏡が多数含まれている。この船は、1323年に元の慶元（寧波）から博多に向けて航海している途中で沈没したと考えられており、積載品は中国からのものである。また、高麗・朝鮮の鏡にも日本製鏡を鑄型に押付けて作った踏返しのコピー製品が少なからず含まれており[久保 2002]、中世の日本鏡がしばしば海を渡っていたことは動かしようのない事実である。これは、青銅鏡生産を牽引してきた中国の鏡作りが退潮傾向にあったことも要因ではあるが、日本製の鏡が優良であり好まれたためであることは間違いない。

古代の官衙関連工房で作られていた鏡とは明らかに一線を画す、中世の「和鏡」。それまでにはなかった、粗型と真土の2層構造からなる鑄型を開発して鑄造効率を上げた技術力、中国鏡の規範から解放された花鳥風月を主題とする和風文様を描いた芸術性。これらの鏡を生産したのは、権力者に仕える特別な技術者でもなんでもなく、七条町・八条院町界隈で活動していた「百姓」といわれる銅細工たちであった。彼らの仕事場は、大工場ではなく職住一体の小さな町屋であり、零細な町工場の総体が、海外でもてはやされるほどの製品を作り出した金属製品工房街の実態であった。ダイナミックな中世東アジア世界の文化交流を考える時、そこには彼ら「百姓」の姿は縁遠い。しかし、それを下支えした生産現場の実態を考えると、彼らの存在は無視することのできない大きなものであったことに思い至るのである。

## 謝辞

本稿をなすに当たり、共同研究のメンバーをはじめ実は大勢の方にお世話になるとともに、多大なご迷惑をおかけした。とくに資料調査に際しては、網伸也・大立目一・百瀬正恒・山本雅和諸氏にさまざまな便宜を図っていただいた。『東寺百合文書』の利用に当たっては、京都府立京都市・歴史館が運営する「東寺百合文書 WEB」(<http://hyakugo.kyoto.jp/>)を活用し、文献資料の読み方については、小出麻友美氏より多大なご教示を得た。ただし、その個々の解釈については筆者の負うところであることを明記する。

## 註

(1)——九町南辺築地推定ラインより南になるが、この時期には町屋が路面側に拡張されていたと考えられ、この地点も九町内に含まれているとみなす。

(2)——多度神社経塚から出土した鏡群に多く含まれているため「多度式鏡」とも呼ばれるが、周縁の形態は中国・宋代の鏡に由来するため「宋鏡式」という呼び名が広まりつつある[久保 1999]。筆者もそれに従いたい。

(3)——日本における真鍮生産は、地金自体の生産は16世紀中頃以降とされ、それまでは真鍮インゴット（あ

るいは真鍮製品）を中国等から輸入してそれを利用していたと考えられている[坪根 2013]。17世紀後半に操業していた平安京左京三条四坊十町跡の工房からは、亜鉛インゴットや真鍮滓、真鍮を溶かした坩堝などが出土しており、この時期には京都でも真鍮地金を生産していたことは確実である[京都市埋蔵文化財研究所 2004b]

(4)——『白氏詩巻』極書。

(5)——久保智康氏は「西の鏡工房」と呼んで、西洞院大路を挟んで東側の「東の鏡工房」と別グループの可能



性を示唆している〔久保1999〕。

(6)——『民経記』寛喜三年(1231)六月三日条。

(7)——『明月記』天福二年(1234)八月五日条。

(8)——本稿における擬漢式鏡の分類は、青木1997に従う。簡略に示すと以下の通りである。

I類:鋸歯文帯と幅線文帯を備えた典型的な擬漢式鏡で、内区の意匠は従来の文様を引き継いだ和様

II類:界圏が花形の「窠文形界圏」

III類:外縁が曲線状に立ち上がる独特の鏡式で、内区の意匠も当初は唐様

(9)——『東寺百合文書』『八条院々町地子帳』(元応元年(1319)六月、へ函21)、「八条院々町地子帳」(建武五年(1338)、へ函36)や「学衆評定引付」(貞治六年(1367)四月二十四日・二十七日、ム函43)などから、この界隈には丹屋(ベニヤ)や白粉焼がいたことが知られるが、彼らも水銀を必要とした。とくに丹屋は、八条坊門小路一梅小路間の室町小路東頬・南から3軒目に住んでおり、この地点からも近い。なお、『東寺百合文書』に関しては、文書名、函番号とも、「東寺百合文書WEB」の表記を用いる。

(10)——『古代政治社会思想』日本思想体系8、岩波書店、1979年。

(11)——『今昔物語集4』新日本古典文学大系36、岩波書店、1994年。

(12)——『宇治拾遺物語』新日本古典文学大系42、岩波書店、1990年。

(13)——『松崎天神縁起』続日本絵巻大成16、中央公論社、1983年。

(14)——西七条には嘉保二年(1095)に鍛冶がいて、針の貢納を拒んでいる(『中右記』嘉保二年六月二十五日条)。

(15)——『餓鬼草紙・地獄草紙・病草紙・九相詩絵巻』日本絵巻大成7、中央公論社、1977年。

(16)——『民経記』寛喜三年(1231)六月三日条。

(17)——『鎌倉遺文』9219。

(18)——『東寺百合文書』ケ函6。

(19)——乾元二年(1303)七月九日(「尼くわんゑ売券案」『鎌倉遺文』21570)。

(20)——嘉禎四年(1238)二月日(「賀茂某所領譲状案」『鎌倉遺文』5210)。

(21)——宝治元年(1247)七月八日「平知村所領地売券案」(「平知村所領地売渡状案」『鎌倉遺文』6853)。

(22)——文永十年(1273)十月十三日「すかわらのむねとき屋地売券案」(「菅原宗時田地売渡状案」『鎌倉遺文』

11434)。

(23)——弘安三年(1280)八月十日「比丘尼某屋地売券案」(「比丘尼屋地売渡状案」『鎌倉遺文』14047)。

(24)——乾元二年(1303)七月九日「比丘尼くわんゑ敷地売券案」(「くわんゑ敷地売券案」『鎌倉遺文』21571)。

(25)——「八条女院院町在所目安注文」『教王護国寺文書』巻1-252号。

(26)——施入された六町内の土地については、正和二年(1313)十二月六日「後宇多上皇院宣案」(『東寺百合文書』シ函8)、文保元年(1317)十月日「後宇多院序下文案」(『東寺百合文書』リ函36)には「梅小路北卅五丈 室町西卅丈」と書かれており、混乱が見られる。

(27)——『東寺百合文書』『八条院々町地子帳』(元応元年(1319)六月、へ函21)、「八条院々町年貢散用状」(延元元年(1336)四月八日、へ函29)、「八条院々町地子帳」(建武五年(1338)、へ函36)、「八条院々町年貢銭散用状」(康永元年(1342)八月十一日、ま函3)、「八条院々町下地検知注進状」(延文二年(1357)四月十三日、ケ函48)には、室町小路一町小路間の梅小路北頬の地に「都維那師、石女」「ツキナシ石アト」「維維那、石」「ツ井ナシ石アト」「□維那師跡」が400あるいは500文の地子として記されている。この地は施入された院町十三箇所には含まれていない。

(28)——『東寺百合文書』『橘熊女屋地売券案』(弘安六年(1283)九月二十五日、ケ函6)('熊女屋地売券案」『鎌倉遺文』14955)。

(29)——③「八条院々町地子帳」には「四郎五郎入道」が記されるが、⑨「八条院々町分帳」には「四郎五郎後家」とあって四郎五郎入道は没しており、⑨が③以降であることは確実である。

(30)——「学衆評定引付」観応二年(1351)五月十三日条(『東寺百合文書』ム函26)。

(31)——「学衆方評定引付」文和四年(1355)四月二日条(『東寺百合文書』ム函29)。

(32)——貞治六年(1367)に院町の百姓が銅細工たちの産業廃棄物によって土地が荒れているため地子減免を嘆願したことに対して、「近年東寺合戦以後、屋敷跡畠事、是又已及十三ケ年」といわれており(「学衆評定引付」貞治六年(1367)四月二十四日条(『東寺百合文書』ム函43)、文和四年(1355)に足利尊氏が足利直冬を東寺に攻めた「東寺合戦」の影響が大きかったようである。

(33)——『東寺百合文書』ム函43。

(34)——貞治元年(1362)の「八条院々町地子并荒不作注文」(『東寺百合文書』へ函67)に正信(正心)、箔屋

六郎は記されている（六郎は文和四年（1355）かとされる「八条院々町公用下地注文」（『東寺百合文書』へ函224）にも見える）。正信の地子は280文と264文、箔屋六郎は360文とあり、1戸主＝50平方丈なので、それぞれ670.8文、495文より低いことになる。5年間のうちに、彼らの占める面積が増加したのであろうか。

(35)——百姓の訴えの多くは事実と反しているとして却下されるが、認められて地子を減少しているケースもある。現地に赴いた検使の照観によると、畠には葱や藍が植えられていたようで、早くもこの時期に商品作物であ

る藍が京都南郊で栽培されていた様子がわかる（『学衆評定引付』貞治六年（1367）四月二十七日条（『東寺百合文書』ム函43）。

(36)——『明月記』嘉禄元年（1225）十一月十一日条。  
(37)——七条町・八条院町界隈以外で中世前期の鏡鑄型が見つかっているのは、平泉、鎌倉、京都白河、博多、大宰府といった都市遺跡と、鑄物師集落と考えられている埼玉県坂戸市金井遺跡B区くらいである。それらはいずれも1～2点から数点程度で、このような大規模な生産体制は見出せない。

## 参考文献

- 青木 豊 1997「所謂擬漢式鏡に関する考察」『国学院大学考古学資料館紀要』13
- 秋山国三 1971「条坊制の「町」の変容過程—平安京から京都へ—」『京都社会史研究』（のち秋山国三・仲村研 1975『京都「町」の研究』法政大学出版局に収録）
- 網 伸也 1996「和鏡鑄型の復原的考察—左京八条三坊三町・六町出土例を中心に—」『研究紀要』3, 京都市埋蔵文化財研究所
- 網 伸也 2004「平安京左京八条二坊十五町跡」京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003—15
- 網伸也・山本雅和 1996「平安京左京八条三坊の発掘調査」『日本史研究』409
- 上村和直 2002「京都「八条院町」をめぐる諸問題—出土漆器を中心として—」『研究紀要』8, 京都市埋蔵文化財研究所
- 馬田綾子 1998「東寺百合文書と民衆史研究」『東寺百合文書にみる日本の中世』京都新聞社
- 王 士倫 1991「中国古代の湖州銅鏡」『古代学研究』124
- 龍谷 寿 1983「第7章第5節 文献にみる遺跡周辺の様相」『平安京左京八条三坊二町』平安京跡研究調査報告6, 古代学協会（のち龍谷寿 2000「平安京左京八条三坊周辺の様相」『平安貴族と邸第』吉川弘文館として再構成）
- 龍谷 寿 1985「IV 2 文献学的考察」『平安京左京八条三坊二町—第2次調査』平安京跡研究調査報告16, 古代学協会（のち龍谷寿 2000「平安京左京八条三坊周辺の様相」『平安貴族と邸第』吉川弘文館として再構成）
- 川嶋将生 1970「東寺領八条院町の構造と生活」『中世の権力と民衆』創元社（のち川嶋将生 1992『中世京都文化の周縁』思文閣出版に収録）
- 久保智康 1999『中世・近世の鏡』日本の美術 394, 至文堂
- 久保智康 2002「朝鮮半島における日本系銅鏡」『韓半島考古学論叢』すずさわ書店
- 久保智康 2007「花枝蝶鳥方鏡の鑄型—平安後期の銅鏡製作をめぐって—」『平安京左京八条三坊九・十町』古代文化調査会（ただし本稿の著述は1997年）
- 小森俊寛・上村憲章 1996「京都の都市遺跡から出土する土器の編年の研究」『研究紀要』3, 京都市埋蔵文化財研究所
- 佐藤直子 1996「法隆寺西円堂奉納の擬漢式鏡について」『MUSEUM』544
- 鋤柄俊夫 2008『中世京都の軌跡—道長と義満をつなぐ首都のかたち—』雄山閣
- 鈴木廣司 1999「平安京左京八条二坊2」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
- 高橋康夫 1983『京都中世都市史研究』思文閣出版
- 角田文衛編 1994『平安京提要』角川書店
- 坪根伸也 2013「「南蛮漆器」の製作背景 真鍮の生産」『時代を作った技—中世の生産革命—』国立歴史民俗博物館 東京国立博物館編 1985『那智経塚遺宝』東京美術
- 仲村 研 1969「京都八条院町の成立と展開」『文化史学』25（のち秋山国三・仲村研 1975『京都「町」の研究』法政大学出版局に収録）
- 野口 徹 1988『中世京都の町屋』東京大学出版会
- 野口 実 1988a「京都七条町の中世的展開」『朱雀』1
- 野口 実 1988b「V章2 文献史料を中心にみた変遷」『平安京左京八条三坊七町—京都市下京区東塩小路町—』京都文化博物館（仮称）調査研究報告1

- 
- 広瀬都巽 1928「和鏡」『考古学講座』2、雄山閣  
広瀬都巽 1938『扶桑紀年銘鏡図説』大阪市立美術館学報1  
堀内明博 1995『ミヤコを掘る―出土した京都の都市と生活』淡交社  
村木二郎 1998「近畿の経塚」『史林』81―2  
村木二郎 2016「擬漢式鏡からみた和鏡生産の転換」『十四世紀の歴史学』高志書院  
百瀬正恒 1996「八条院町の住人構成」『日本史研究』412  
百瀬正恒 2006「中世京都 都市域の様相と生産・流通・消費」『中世のなかの「京都」』中世都市研究12、新人物往来社  
山田邦和 2009『京都都市史の研究』吉川弘文館  
山本雅和 1996「平安京左京八条三坊出土の銭鑄型」『研究紀要』3、京都市埋蔵文化財研究所  
山本雅和 2006「八条院町の生産」『鎌倉時代の考古学』高志書院  
脇田晴子 1981『日本中世都市論』東京大学出版会  
京都文化財団 1988『平安京左京八条三坊七町―京都市下京区東塩小路町一』京都文化博物館(仮称)調査研究報告1  
京都市埋蔵文化財研究所 1982『平安京左京八条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告6  
京都市埋蔵文化財研究所 1984a「左京八条二坊」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』  
京都市埋蔵文化財研究所 1984b「左京八条三坊」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』  
京都市埋蔵文化財研究所 1988「平安京左京八条三坊」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』  
京都市埋蔵文化財研究所 1991「平安京左京八条二坊」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』  
京都市埋蔵文化財研究所 1994「平安京左京八条三坊2」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』  
京都市埋蔵文化財研究所 1996a「平安京左京八条三坊」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』  
京都市埋蔵文化財研究所 1996b「平安京左京八条三坊1」『平成6年度 京都市埋蔵文化財調査概要』  
京都市埋蔵文化財研究所 1996c「平安京左京八条三坊2」『平成6年度 京都市埋蔵文化財調査概要』  
京都市埋蔵文化財研究所 1997「平安京左京八条二坊」『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』  
京都市埋蔵文化財研究所 1998a「平安京左京八条二坊1」『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』  
京都市埋蔵文化財研究所 1998b「平安京左京八条二坊2」『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』  
京都市埋蔵文化財研究所 1998c「平安京左京八条三坊1」『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』  
京都市埋蔵文化財研究所 1999a「平安京左京八条二坊1」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』  
京都市埋蔵文化財研究所 1999b「平安京左京八条二坊2」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』  
京都市埋蔵文化財研究所 1999c「平安京左京八条三坊1」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』  
京都市埋蔵文化財研究所 1999d「平安京左京八条三坊2」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』  
京都市埋蔵文化財研究所 2002「平安京左京八条二坊」『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概要』  
京都市埋蔵文化財研究所 2004a「平安京左京八条二坊十五町跡」京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2003―15  
京都市埋蔵文化財研究所 2004b「平安京左京三条四坊十町跡」京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2004―10  
京都市埋蔵文化財研究所 2005『平安京左京八条三坊三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005―10  
京都市埋蔵文化財研究所 2008「平安京左京八条三坊二町」『昭和51年度 京都市埋蔵文化財調査概要』  
京都市埋蔵文化財研究所 2010「平安京左京八条三坊九町跡」京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010―6  
京都市埋蔵文化財研究所 2011a「平安京左京八条三坊一町」『昭和52年度 京都市埋蔵文化財調査概要』  
京都市埋蔵文化財研究所 2011b「平安京左京八条三坊二町1」『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』  
京都市埋蔵文化財研究所 2011c「平安京左京八条三坊二町2」『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』  
京都市埋蔵文化財研究所 2012「平安京左京八条三坊二町」『昭和54年度 京都市埋蔵文化財調査概要』  
古代学協会 1983『平安京左京八条三坊二町』平安京跡研究調査報告6  
古代学協会 1985『平安京左京八条三坊二町―第2次調査』平安京跡研究調査報告16  
古代文化調査会 2007『平安京左京八条三坊九・十町―七条町の調査一』  
日開調査設計コンサルタント 2007『平安京左京八条二坊十五町』日開調査設計コンサルタント文化財調査報告書1

(国立歴史民俗博物館研究部)

(2017年5月19日受付, 2017年7月31日審査終了)

---

## Production Activities in Shichijō-machi and Hachijōin-chō in Medieval Kyoto : Focusing on Copperwork

MURAKI Jiro

According to historical narratives and written sources, such as *Tōji Hyakugō Monjo* (medieval documents preserved at Tōji Temple), Shichijō-machi and Hachijōin-chō in Kyoto were once home to merchants and artisans of copperwork and other crafts. In these districts, excavations have been frequently made, yielding concrete findings on artisans. In particular, many casting artifacts have been unearthed, which indicates the existence of the largest metalworking community in medieval Japan.

The distribution of remains of metalworking activities shows that the production of copper mirrors started in the northeastern block near Shichijō-machi and then concentrated in the southern block between Hachijō-bōmonkōji and Umekōji Streets during its heyday in the 14th century. These areas, however, sustained massive damage due to a civil war in the mid-14th century. Artisans were scattered, and the history of the metalworking community came to an end. The molds excavated from Shichijō-machi and Hachijōin-chō indicate that artisans designed new mirrors one after another and developed techniques to make them a reality during the 300 years between the rise and fall of these districts. Most of the mirrors distributed in Japan were produced in Kyoto, and many of them are considered to have been produced in these metalworking districts. Some of the mirrors were exported to the Chinese continent and the Korean Peninsula, and they were copied and imitated there. These findings indicate that artisans in Shichijō-machi and Hachijōin-chō had the most advanced technology in the Eastern Asia at that time.

These copper artisans fell into the “hyakushō” class (the masses), according to the tax ledgers for Inchō, the estate of Tōji Temple. Archaeological findings indicate that townhouses with a narrow frontage on the street were used as workshops and that these small workshops constituted this large metalworking community. In addition to these archaeological sources collected over a long period of time, written sources are analyzed in this study to reveal the nature of the artisans who supported the technical advancement of medieval Japan.

Key words: copper mirror, Shichijō-machi, Hachijōin-chō, copperwork, caster